

性のバランスを回復し、 神を天の父であり天の母として 理解する必要性

文 誉進 (Ye-Jin Moon)

2013年1月7日に、文鮮明師の妻であり、世界的な統一運動の現在の指導者である韓鶴子(Hak Ja Han Moon)女史は実に重大な、そして歴史的な発表をしました：その日をもって我々統一運動の者たちはすべて、神を天の父ではなく‘天の父母’(Heavenly Parent)と呼びなさい、と(1)。天の父母という言葉は、神が天の父であると同時に、等しく天の母であることを示しています、なぜなら韓国語で‘父母’という単語は父親と母親の両方を意味するからです(2)。

今日までの運動において、神を天の父として、男性として表すのが習慣的でした。それは、主として神がいつも男性の言葉で表現されていた、旧約と新約時代から来る影響でした。統一神学の主要なテキストの1つである、『原理講論』(英語版 Exposition of the Divine Principle, EDP)は、主としてクリスチャン読者のために書かれたことを認めています(3)。それはユダヤ教とイスラム教も同様ですが、キリスト教的な見地から神を見ることについての欠点の1つが、神のイメージが天の父に限定されているということです。

これは世界の他の宗教の伝統における、神の表現とは著しく異なっています(4)。しかしながら、この運動が、中心的な神の摂理であり、救世主の運動であり、神の真理に対する無知から墮落した人々を導くことができる「一つの統一理論体系の宗教的な理想」を提供する「地球上のただ一つの所」(天一国)であると主張するために、明らかにされなければならない最初の論点は、神を男性の言葉で見続けるべきでないということです。神は天の父であり天の母でもある天の父母であるからです(5)。

この論文は、なぜ唯一の神が天の父であると同時に天の母であるかに関して、簡潔な考察を行います。それは蕩滅復帰歴史の間に、アダム・エバの墮落とエバのより大きい罪に起因することにより、天の母の存在がなぜ隠されていたか、その理由を論じます(6)。その原因を理

解するために、天の父母の永遠の創造目的と絶対的価値基準から始めなければならないという立場を取ります。これは統一原理の代わりに「神の心情原理」と呼ぶもので説明されます(7)。

人間の価値を論じることに於いて、我々は、人間が万物の総合実体相であり、そして霊的および肉的二重の世界の宇宙総合実体相であることが何を意味するか、明確に定義することから始めます(8)。我々は、天の父母が、1人の人間ではなくて、それぞれ等しく万物の総合実体である、性別の異なる一対の男性と女性でもって、創造のプロセスの95パーセントの分担を終えられた理由を説明しなくてはなりません(9)。

さらに、天の父母の永遠の創造目的は、たえず100パーセントの‘理想的な’現実を実現することではなく、人間と共同で創造することであり、5パーセントの人間の責任分担を尊重することです(10)。それ故、人間の5パーセントの部分を再検討する必要があります。以下に見るように、これは個別および共同体という二重の位置における人間の責任分担である、三大祝福の5つの役割の成就と関係があります(11)。

天の父母は人間の5パーセントの責任分担の成就がなければ創造理想を実現することができないので、我々は最初の人間の先祖であるアダムとエバと彼らの墮落がもたらした、さまざまな結果から始めなくてはなりません。墮落の経過をたどるのに、ただアダムとエバの罪の意味を共同体レベルで検討するだけではなく、彼らの異なる個体レベルとしての罪の行為を綿密に調べなくてはなりません。

なぜならば、アダムとエバの異種なる行為が人類の男女に異種なる影響を与えたからです。彼らのそれぞれの行為の結果に加えて、人間より低い価値の被造物である天使長ルーシエルとアダム・エバの墮落が、共通にもたらしたものを検討しなくてはなりません。人類の価値を他の被造物より貶(おとし)め、宇宙的な四位基台に破壊をもたらしたからです(12)。

墮落のもう一つ結果として、アダムとエバが人間の価値を肉体的な万物の下にさげることによって、人類は天の父母に関する内的・霊的知識と、肉的世界に関連した外的・肉的知識を失いました(13)。墮落後、墮落した人類と墮落した人間の文化は、あたかも霊的世界を経験する霊的な感覚と肉的世界の仕組みを理解するための知性に欠けた、肉体だけの万物のような、卑しく、無知で、原始的な立場から始まりました。

したがって、蕩滅復帰歴史は、それぞれ宗教と科学を通じて墮落した人類の内的、外的知識の理解を高めるための、天の父母の95パーセントの努力によってなされました(14)。しかし、たとえその点が適切に理解されなければならないとしても、そして天の父と母が、人間にたいして、いかに早く内的、外的知識を回復することを望んだとしても、人間の5パーセントの責任分担に干渉することはできず、人類の成長のレベルに応じて対処しなければなりません。しかし、中心的な基台摂理は繰り返し失敗と延長を経験したために、外的知識と、特に宗教を通じた内的知識の回復は複雑な道を辿りました(15)。

人間の神にたいする理解は同様に複雑な道を辿りました。最初に、アダムとエバは天の父母を究極の親として、天の父母と人類を結びつける理想的な最初の人間始祖となるべきでした(16)。しかしながら、彼らが天使長ルーシエルと性的な墮落行為を行ったとき、性行為は二人を一つにし、血統をつなぐために、人類は天の父母と、人間より低い被造物という二つの、すなわち複数の親を持つようになりました。どちらも人類の血縁の親としての関係を持つことになりました(17)。これは、初期の宗教の表現が、唯一神すなわち天の父母を崇拝する代わりに多数の神々を信じる多神教であった理由です。

さらに、女性を代表すると同時に天の母を代表するはずであったエバが、より許されない二重の性的な罪を犯したために、墮落した人間は女性たちを下層の性的対象と見なし始めました。それだけでなく、‘女性の神’に関する彼らの概念は、グロテスクな[性的]器官の誇張された性の倒錯を含めて、性を通じた‘豊かさの様々な側面’に関連してのみ、しばしば偏って表現されました(18)。

その後、復帰が本格的に最初の一神教であるユダヤ教から始まったとき、女性の復帰はまだなされていなかったために、そしてエバとその延長である女性全体が、アダムの一つの罪と比較して、絶対的な価値基準から二度違反した‘二重の罪人’であったために、復帰はもっぱら男性の側から始めなければなりません。従って、神は、唯一神の信奉者の間でさえ、圧倒的に男性の言葉で把握されました(19)。ユダヤ教に続いて、キリスト教は、ただ一人の男性の基台であるイエスから始まりました。そしてキリスト教において、花嫁としての寄与はなく、父なる神として、男性的な解釈を固く続けてきました。

その後、キリスト教とその遺産から神の摂理の使命を継承した統一運動は、初めに父なる神とともに、男性の中心人物によって始められました(20)。女性の中心人物である‘真の母’とその娘たちの活動がなされる前に、天の父とともに働いている男性の中心人物である‘真の父’による復帰がなされました(21)。**‘真の母’**とその娘たちは、天の母の降臨と女性解放に道を開かなければならず、そしていまだ継続している復帰のプロセスを完了しなくてはならないのです。

1. 統一神学における問題

20世紀の主導的な神学者の1人であるポール・ティリッヒ(Paul Tillich)は次のように神学を定義しています。

神学は2つの極、つまりその基礎となる永遠の真理と、永遠の真理を受け取らなくてはならない世俗的な状況の間で揺れ動きます。完全にこれらの2つの要請の均衡を保つことができた神学体系は多くありませんでした。それらのいくつかは…それ以前の神

学の業績、伝統的な考えと解決に照らし合わせて、それを新しい異なる状況にあてはめようとしています。彼らは永遠の真理とその世俗的な表現とを混同しています(22)。

ポール・ティリッヒの‘2つの極’理論が神学を定義する正しい方法であるとして、我々は同じことを、墮落した人類を新しい真理で導く使命を持った摂理的な運動とみなされる統一運動の現在の神学にも適用すべきです(23)。すなわち、統一神学の‘新しい真理の表現’と呼ばれるものも、必ず2つの極に分けられなくてはなりません:天の父母の永遠の創造目的あるいは絶対的価値基準という一つの極と、復帰のプロセスというもう一つの極です。

後者は、墮落から始まった人類の失敗を償うという目的のための現世的な解決に過ぎず、墮落が神の永遠の真理と何の関係もないように、復帰がひとたび完了したら、二度と再び繰り返すべきではないものです(24)。さらに、神の心情原理の立場から見れば、神の永遠の創造目的であるものを、天の父母の絶対基準と必ずしも一致しない、自由意志を持った人間の選択の帰結であるものから分離する組織的な努力は、いかなる事態を検討するのにも適切な方法です。すなわち、天の父母の永遠の創造目的は、天の父と母が100パーセントを完成することではなく、人類の自由意思による5パーセントの責任分担と合わさって、共同で創造することだからです(25)。

その内容を2極に分けるという上記の認識から、統一神学の主要な源の1つである、現在のEDP(『原理講論』)に接するとき、我々は天の父母がいかなる存在であるか表現するのに、ある困難に出くわします。まず始めに、そのテキストは、「世界のすべてのものは創造者の見えない、神性の実体的な表現」であるというように、我々人間が‘見えない神の神性’を理解することができる1つの方法が、神が創造した被造物を観察することであるという前提から始めます(26)。

そして、我々が被造物において「すべてのものは二性性相の相互関係を通じて存在するように創造されている」と観察するように、神すなわち天の父母は‘二性性相’の統一体である、あるいは「神は二性性相が調和している絶対者であられるから、神は三数的な存在である」と推論することができるかと論じます(27)。さらに、「すべての被造物は内性と外形、男性と女性、表裏、内外、前後、左右、上下、高低、抑揚、長短、広狭、東西、南北などのように、二性性相の相対関係によって存在している」と説明します。なぜなら、すべての被造物は、二性性相の相対関係を有している天の父母のまさにその本質を模倣しているからです(28)。

天の父母の本質をさらに探究するのに、EDPは被造物における性相と形状を、天の父母の本性相(Original internal form)と本形状(Original external form)——他の有力なテキストではOriginal Sungsang, Original Hyungsangと表現している(29)——を、その考察の出発点としています。そして本性相と本形状の基本概念の下で、テキストは主体と対象、男性と女性、そして

東洋の陽と陰などの、その他の二性を論じながら、「神は性相的な男性格主体であられるので、我々は神を父と呼ぶ」(イタリックは筆者)という、驚くべき、当惑させる結論に達しています(30)。

これは非常に困惑させる、そして矛盾した内容です。なぜなら、もし被造物に見られるすべての二性が、一なる統一体である天の父母の二性性相あるいは二重の位置と等しいと仮定するならば、一なる統一体である天の父母なる神は、天の父というような二重の位置の片方だけで表現されることはできないからです(31)。人間の場合のように、父は相対する母を持っています。実際、文師の教えを集めた『天聖經』で、文師は「人間に似て、神は“我々の父と母”である」と明らかに述べています(32)。

著者は、我々人間が見えない天の父母を理解することができる一つの方法がその被造物を通じてであるという EDP の基本的な主張に同意します(33)。また、天の父母が二性性相または二重位置の一なる統一体であるという推論にも同意します。なぜなら、天の父と母が創造されたすべての被造物があらゆるレベルにおいて二重性をもって造られているからです(34)。

しかしながら、天の父母だけが原因であり、人間を含めた被造物は造られたもの、あるいは結果なので、人間は彼らの原因である天の父と母を、天の父と母がご自身を理解するように理解できると言えないのは明らかです。我々が天の父母を推測しうる最善は、天の父と母の姿に似せて造られ、最も完全な被造物である男と女としての人間を理解することによってなされます(35)。

特に、天の父と母の完全なイメージとしての被造物を実体化する、天の父母の 95 パーセントの責任に相当する創造のプロセスである、象徴的な六段階の終わりに、創造全体を象徴する神の最後の創造的な行為において、天の父母は一人の人間であるアダムだけでなく、アダムとエバ、男性と女性で創造を終えました。これは、まさに人間が三大祝福の第二の祝福を達成することによって父親と母親になるように定められているように、創造者であり人間の究極の親である天の父母に対する我々の最も完全な理解は、性のバランスがとれた、天の父であり天の母である起源の(原因における、原因の)統一体であることを示す有効な表現です(36)。

被造物を通じて、特にすべての被造物の総合実体としての人間が何であるかを理解することを通じて、天の父母について最も良く理解するという目的をもって、この研究は、最初に天の父母が創造することを決めた時に確立し、創造過程を通じて適用した、まさしくその理念に従って、天の父母の永遠の創造目的と絶対的価値基準の意味を考察します(37)。天の父母の永遠の創造目的は、神が常に単独で 100 パーセントの完ぺきな世界を創造することで、あたかもその中のすべての被造物が単なるロボットであるかのように、被造世界を 100 パーセント操ることではありません。そうでなく、天の父母が創造した存在と共同で創造することです。天の父母は、被造物を創造し、それらに適切な目的を与えることによって、最初の 95 パーセントの

責任を成しとげます。その後、被造物は、それらが創造された目的を果たすために、5パーセントの自由意志による責任分担を果たすように導かれます(38)。

すべて被造物の中から、ただ人間だけが、肉的世界だけでなく霊的世界をふくめた全ての被造物の宇宙総合実体相です。我々は天の父と母の完全なイメージであり、従って子女としての唯一の被造物です。人間の5パーセントの責任分担は、三大祝福に関係した5つの役割のすべてを完成することです。それは神の理想の100パーセントを実現するために、人間が霊的および肉的世界の残された5パーセントを天の父母と共同で創造することに相当します(39)。そして、人間はその成果を天の父母におさげするのです。

2. なぜ神は天の父と天の母としての天の父母なのか：創造の前後の神の動向の考察

今日、教会内において、メンバーたちが天の父母の本体に関する問題を取り上げています。あるメンバーたちは、天の父母としての神を複数形の Heavenly Parents と呼ぶべきではないかと言い、他のメンバーたちは、神は本来、男性であって、天の母の側面は天の父の本来の本体から派生したものと見るべきだと言います(40)。

この論議において、著者は、唯一の起源であり、‘永遠なる、自存者’、‘完全’で‘絶対的’な存在である神が(41)、なぜ天の父母(単数形)と呼ばれ、そして、いったん神が創造することに決めるや、なぜ天の父と天の母になったかを論じます。この議論を理解する過程は、起源あるいは原因の立場にある神が、創造することを選択される前の状態から、神が創造することを選択され、そして被造物と共に存在することを決めた後の結果の位置までの、神の動向の考察を伴います。

起源あるいは原因の位置と結果の位置までの神の動向を区別するとき、創造の前の起源の位置におられる神は、明らかに分割されていない、全てを包含されておられる根源的な唯一者であります。その時、神は唯一の根源的存在であったからです。これは、神が根源的一者として存在しているとき、たとえそのような特徴が神の中に内在しているとしても、我々は神を二性相あるいは二重の位置のようなカテゴリーに分けようと試みるべきではないことを意味します。さらに、この起源的位置にある神は、あり得るすべてを包含しながら、分割されることのない、数的に1として表現されるだけです。

さらに、神が創造の選択をした後でさえ、神が被造世界全体をどのように創造するか、構想を描きながら、情動的な意志、目的、理念——神の心情原理——を最初に確立した時を分離する必要があるでしょう(42)。意志、目的、理念を確立して、神は、創造のプロセスの95パーセントの責任において、実際にその目的を心を込めて実行し始めました。言い換えれば、創造過

程における神の責任分担の終わりにおいて、最終的に人間に対して、天の父と天の母になるという絶対的で永遠の目的を確立したとき、しかし神がまだいかなる実質的な創造もしておらず、唯一の存在であったとき、天の父母は依然として単数形で考察されるべきです。その時点において、神は唯一の存在でした。

神が実際に実体化した創造物は何もなく、意志、目的、理念、すなわち神の心情原理においてのみの天の父母でした。それから、創造過程に着手する前、神が意志あるいは創造目的を確立したとき、神に内在していた二性相あるいは二重の位置が外的に表面化し始め、創造過程を通じて被造物を具体化するようになりました。このようにして、創造過程の天の父母の95パーセントの責任分担の終わりにおいて、最後の創造的な行為として、神がアダムとエバ、すなわち人間を生み出したとき、神は最終的に人間に対して天の父と天の母である天の父母となりました。

‘天の父母’の位置は起源あるいは原因の立場にある神を示します。たとえ神が心情において、すでに意志あるいは創造目的を持っていたとしても、それは本格的に創造過程に着手する前の、神の単数の状態を示します。神が‘天の父’と‘天の母’である位置は、結果の位置への神の顕現を示します。それは神が、天の父と母の完全なイメージとしての男と女の人間、全被造物の総合実体であると同時に、創造過程において形成された、すべての四位基台の、相対的な位置の頂点にある男と女に至る創造過程の神の責任分担を完了したことを意味します。

すべての被造物の中でも最も完全に神を表している神の最後の創造的な行為である人間の創造は、一人の人間だけではなく、異なる性の二人の人間でなされました。同時に、起源の位置の天の父母は、人間の父と母のような、明らかに人間の姿に似た天の父と天の母として、二つの位置に現れました。さらに、最後の被造物である人間が、別個の個体的な位置にありながら等しい人間の価値を持つ男性と女性であるのと同じように、天の父と天の母が分れて出現したとき、天の父と天の母はそれぞれ、同等の価値の個体的な位置につきました。

天の父母、天の父、天の母の三つの位置のそれぞれの数的価値は「1」であり、その三つの位置の合計が数値的に3であることを考える時、起源(正)の位置の天の父母と、天の父と天の母の結果の位置の間の動的関係をより良く理解できます。「神は絶対者でありながら、相対的な二性相の中和的主体であられるので、三数的な存在である」という『原理講論』の文章は、この議論を裏付けます(43)。起源の位置の天の父母の数的価値について、「1」であることはすでに論じました。しかし、いったん神が創造を決定し、永遠の創造目的が、正分合作用または四位基台の確立を通じて、「1」の数的価値をもつ起源の神に似せて、個別の実体すなわち個体の位置を繁殖することであったために、四位基台の‘合’の立場も、‘分’の立場にあるそれぞれも、必然的に「1」の数的価値を持つようになります(44)。心情原理の‘真の愛’の繁殖

のための、神の永遠の創造目的である、四位基台のそれぞれの位置は、神の理想がよく機能し、永遠に続くために、必然的に「1」という数的価値を持たなければなりません(45)。

上述の内容がなぜ事実でなくてはならないか明確に理解するために、思考実験として、四位基台のそれぞれの位置が「1」という等しい数的価値を所有しないとされたときのシナリオを想像してみましょう。‘分’のレベルの二つの位置において、一方の数的価値が「1」であるのに対し、もう一方が「0.5」とであると想定しましょう。標準的に、「1」の数的価値をもつ‘正’の位置から、二つに分かれた‘分’へ分離する目的は、二つの位置の各々の数的価値、「1」と「1」を合わせることです。そうすることにより、ひとつの独立した実体である‘合’が生み出され、その価値が天の父母の本来の唯一性に似て、「1」にならなければなりません。

しかしながら、もし「1」と「0.5」の値を結合させると、‘分’の2つの合計価値は「1.5」にしかありません。そして「1.5」が二つの実体の結合した価値を意味するならば、その二つから‘合’の位置に達するとき、その合計は二で割られなくてはならず、一個の実体の価値として、それは「0.75」にしかありません。それでは‘合’の位置に、天の父母の本来の唯一性に似た「1」の数的価値より低い価値しか残しません。それ故、明らかに、四位基台のそれぞれの位置が数的価値において等しくないこのシナリオは、神の永遠の創造目的のためには有効ではありません。

おしなべて、神を単数形で天の父母(Heavenly Parent)と呼ぶことは正しいです。なぜなら、まだ創造を開始していなかったとき、神は一人であったことを意味するからであり、その起源(天の父母)から結果(天の父と天の母)の位置へ移行されたのです。起源の位置において神を天の父母と呼ぶわけは、実際そうであったように、創造過程の終わりに、人間との関係において、天の父母の父性と母性を表すことが予期されていたからです。したがって、人が天の父母に呼びかけるとき、調和された天の父と天の母と関係をもつことを願っています。しかしながら、様々な理由で、我々は人間の父や母に接するように、明確に、天の父あるいは天の母の一方にだけ話しかけることもよくあるし、そうする事が許されるのです。

上述したことから見て、神をただ Heavenly Parents と複数形で呼ぶという提案は不完全で、正しくありません。それはアダムとエバの創造でもって、創造過程の終わりに、天の父と天の母になることに決めた起源の神を含まないからです。さらに、起源の神はもっぱら天の父であり、天の母はただ創造の一部であるに過ぎないという主張は、2つの面においてまさに言語道断です。第一に、このような二重の位置の現われが、ただ創造過程の終わりに、創造を決意し、神(天の父と天の母)の子女としての人間を創造するという‘自由意志’を行使した結果に過ぎないのに、いち早く神を父と母の二重の位置に分けることによって、神の本来の唯一性を損ないます(46)。第二に、天の父が天の母に先行したというのは、一なる根源存在である神が完全ではないと主張しているのと同じです。

辞書によれば、‘完全’について、これ以上は何も「…改善されること」はできないという点で、「欠陥や欠点がない…」と定義します(47)。従って、もし唯一なる根源者(原存在)の神が完全であるという、まさしくその定義であるなら、創造過程における天の父母の責任の終わりに、天の父と天の母として現れる、内在している父性と母性を含めて、創造される実体として現れるものは何でも、完全なる神の中にすでに内在していなければならないということになります。したがって神が完全であるためには、天の父と天の母の両方になる可能性は、すでに唯一なる根源者(原存在)の神に含まれていなければなりません。これは、天の母ではなく、天の父だけが神の起源の位置に存在していたという主張は、根源者(原存在)の神が完璧な存在ではないとほのめかしていることを意味します。

そのような天の父と天の母に対する不平等で、偏見を持った見解は、墮落した、文化的に条件づけられた男性と女性の価値観に由来するものなのか、と疑わざるをえません。そのような観点は、天の父母の永遠の創造目的と絶対的価値基準とは全く関係はなく、墮落と関係するものです。実際、我々が人間の価値の意味と人間の墮落の示唆する意味を明確に認識するとき、天の父と天の母に対する我々の理解も含めて、なぜ性(ジェンダー)の不平等が人間社会に入ってきたか理解することができます。その理由に関しては、我々は天の父母と共に創造に関与する人間の責任分担と、被造物の中における人間の価値を調べることになるでしょう。そうすることによって、我々は人間の墮落の意味を追求することができるのです。

3. 三大祝福完成のために天の父母と共に創造する人間の責任分担

三大祝福における5つの役割と責任に関する個別のおよび共同的レベルでの概観

『原理講論』において、人間に与えられた三大祝福の象徴的な意味は、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。……すべての生き物を治めよ」という創世記 1:28 を引用して、簡潔に説明されています(48)。引用文の最初の‘生めよ’は、各個人が「神を中心とした授受作用を通じて……心と身体が一つなった四位基台」を形成するという、個体完成の第一祝福と定義されます(49)。第二祝福すなわち‘ふえよ’は、「完全な個体のイメージに似た…神の理想と一致する四位基台」に基づいた家庭あるいは社会を創造することに関しています。例えば、「家庭的四位基台を形成するために、アダムとエバは夫と妻として愛で一つになり、子女を育てるべきです」(50)。第三祝福すなわち「すべての生き物を治めよ」とは、人間は自分自身の中に「すべての万物の不可欠の属性を持った総合実体相」を含んでいるのであるから、「人間の自然界に対する主管性の完成」と解釈されます(51)。『天聖經』や『新版統一思想要綱』のような他の有力な統一主義のテキストにおいても、三大祝福の論議は、『原理講論』におけるのと同様、簡潔で、おおまかです(52)。

三大祝福の問題に取り組むために、著者は、人間が天の父母の創造物全体の総合であり、天の父と母の完全なイメージを持つ唯一の創造物であるという事実から始めます。したがって、人間が三大祝福の責任を果たすとは、天の父母の95パーセントの責任の後に、人間が創造過程の5パーセントを成し遂げ、それによって天の父母を中心とした永遠なる理想世界の、安着した100パーセントを成し遂げることです(53)。

この問題に関連するのは、李相軒氏が存在における「個別」と「連体」の存在様相について説明しているように、すべての被造物は、個体と共同体という切り離すことのできない二重の位置の存在形態を与えられているという事実です(54)。それ故、三大祝福の意味は、人間の責任の切り離すことのできない個体的および共同体的な人間の責任分担にもまた関連してきます。

この見解において、第一祝福は個体レベルでの人間の完成を論じています。男性であろうが女性であろうが、それぞれ天の父母との縦的な関係を意味します(55)。第二祝福は、人間社会における共同体レベルでの人間完成を意味し、第三祝福は、霊的および肉的世界という二重の位置で、他のすべての被造物に関連した共同体レベルでの人間完成に関してしています。したがって、人間の共同体レベルの責任を構成する第二と第三の祝福は、互いに影響し合う、個人と被造世界との横的な関係を表します(56)。

三大祝福の達成において、それらはお互いに切り離せません。それらは、ひとつになってお互いが個体および共同体レベルの人間の責任分担を果たすとき、縦的、横的レベルにおいて人間の完成をもたらします。出発点が天の父母と人間との縦的關係であるので、人間の完成は必ず個体の位置から始まらなければならないのですが、完成するには、様々な共同体レベルにおける完成、すなわち横的な人間の責任を全うすること意味します。

三大祝福を成就するために、人間は著者が5つの役割と呼ぶものを果たすように要求されます。最初の役割は第一祝福に関するものです；それは、霊人体(生心と霊体)と肉身(肉心と肉体)の心情的な統一を通じて個体完成を達成することによって、天の父母の真の子女になることを言います(57)。これは人間として、男性と女性にともに当てはまります。すべての人間は、全ての霊的および肉体的な被造物の総合実体相であり、したがって天の父母の真の子女となる資格があります。

さらに、個体完成は絶対的価値基準から人間の価値を認識することによってのみ始めることができるために、第一の役割を果たすということは、人が絶対的基準の絶対的所有者になる必要があることを意味します。これはほかでもなく神の心情原理であり、その中心は天の父母と共同で創造する5パーセントの人間の責任分担です。

ひとたび、天の父母がアダムとエバに人間の責任分担に関して絶対的価値基準を教えれば、その後、アダムとエバの子女やその後の人類にそれを教えることは、親としてのアダムとエバ

の責任になっていたため、この点はなおさら重要です。天の父母は、人間の責任分担に関する絶対的基準の見地から、それぞれの人間に何が正しくて何が悪いのか、念押ししません。それは人間の父母の役割だからです。理想的には、すべての人間が父母から絶対的基準を学んで、彼らが個体完成を達成するための年齢である 21 歳に達するときまでに、最良の心情原理的な選択ができるようになることです(58)。

次の3つの役割は第二祝福と関係があります。第2の役割は、自分自身の兄弟姉妹と、そして共通の始祖であるアダムとエバを共有する人類全体に対して、いかにして真の兄弟姉妹になるかということです(59)。もし人が、同じ理想に到達するように他の人々を助けようとしなくて、自らを完成しようと努力をするだけでは十分ではありません。それはまた、私たちが、個体完成を目指して、自身と自分の子女たちの成長を支援するように、霊的および肉的世界の両方である宇宙において、人類一家族として、そのようになるために、理想的な社会環境を創造するという共同の努力をしなくてはならないことを意味します。

真の兄弟姉妹になることは、他の人々を尊敬することであり、それは、その創造目的が人間とは全く異なっている肉身のみの存在(動物)が行うような、本能的、気ままな性行為をすることによって、彼らを傷つけないことを含みます。ただ1人の異性の永遠の配偶者だけがいるべきであることを明確に理解して、人は他の人々を性欲のために、むやみに求めるべきではなく、彼らを真の兄弟姉妹として接すべきです。

第二祝福の成就のための第二の役割(三大祝福における第3の役割)は、真の夫あるいは真の妻になることです(60)。理想的には、人はただ一人の異性の配偶者を持つべきです。これは、すべての男性と女性は、それぞれ天の父母がただ一度造られた全被造物の総合実体相であり、天の父母は人類始祖一組をただ一度だけ造ることで、天の父母の創造の責任を全うされたという事実からくるものです。

彼らは等しい人間的価値を持つ、異なる性の一人の男性と一人の女性、すなわちアダムとエバでした。天の父母は、一人の天の父と一人の天の母からなる、一なる統一体であるので、なおさらそうです。天の父は天の母という一人の配偶者を持っており、天の母も同じように天の父を持っています。したがって天の父母が、同様に、男性と女性に対して、ただ一人の永遠の配偶者だけを愛し、大切にすることによって、天の父と天の母の完全なイメージに似るようにと、願われるのは間違いありません。

真の配偶者になるためのもう一つの要点は次のようです。：人がひとたび配偶者と結婚し祝福されると、個体完成を維持する努力だけでは十分ではありません；人は、離婚しないことも含め、配偶者が個体および共同体レベルでの心情原理的な真の愛の選択が継続するように協助するために、共同体レベルで尽力する必要もあります。たとえ個人が異性の配偶者と結婚の祝福を受けて、生活の基本的な共同単位である家庭を出発したとしても、それぞれが常

に個体の責任分担を持っています。したがって、たとえ彼らが共同の家庭の営みに関与しているとしても、夫と妻は常に独立した個体の営みをしています。

これは、人が個体レベルで選択することは何でも、配偶者に対してだけではなく、自分自身にたいしても、そして他の家族メンバー、特に子供たちにたいして影響を与えることを意味します。そのため、もし自分の配偶者が人間の責任部分に関する絶対的基準を守れないということがあるとすれば、たとえ配偶者に代わって配偶者自身の責任分担を満たすことができないとしても、人は、配偶者が過ちを認識し、絶対的基準に戻るように導くための絶えざる努力をしなければならないでしょう。長い目で見れば、家族全員は何らかの形で同じ共同の運命を抱えなければならないために、配偶者を助けるための警告的な行動は、配偶者だけではなく、自分と他の家族のメンバーのためになるでしょう。

第二祝福に関する3番目の役割(三大祝福における第4の役割)は、自分の子女にたいしては真の父母になり、父母にたいしては真の子女になることです。これらは相互につながった関係です(61)。最初に、子女に対して真の父母となる前に、人はすでに個性完成を達成し、自分の夫あるいは妻にたいして真の配偶者になっていなければなりません。

人間の繁殖の目的は、肉身のみの被造万物の場合のような、単に種の繁殖だけではなく、天の父母とともに共同で創造しながら、天の父母の真の子女を育てることであります。したがって、子女を得た後で、子女が個性完成に達するための21年の成長期間において、子女の成長のそれぞれのステップに父母は徹底的に関与しなければなりません(62)。子女が父母の努力にたいして正しく、適切に応えているか、たえず見守りながら、父母は心情原理的教育を通じて、真の愛で子女を育てなければなりません。

育児において、父母は天の父母に似ます。特に、子女の成長期間に、天の父母が万物と最初の人間を創造するための95パーセントの責任分担を持っていたのと同様に、父母は子女を理想の人格完成へ育てるための、95パーセントの責任分担を持っています。もちろん、人間の子女は天の父母から与えられた天賦の能力を持って生まれます。そして、人間の完成に向けての進歩的、漸進的な子女の成長期間に、父母は、天の父母の、父母としての創造的な責任分担が、子女を理想的な人間に形づくると考えなくてはなりません。そしてそれは父母が、模範的な心情原理的な真の愛の教育と、惜しみない支援と、子供が成功することを学ぶことができる理想的な社会の環境を提供することによってなされます。

父母は、子女たちに、自制する能力を育くみ、他の人たちと真の愛で愛し合うための、より良き愛の表現を習得させなければなりません。すべての上記の要素が十分に父母と社会環境から与えられるとき、子女は積極的に、学んだことすべてに応え、5パーセントの責任分担を成し遂げるでしょう。

父母が子女にたいして真の父母になる役割に関連して、他方では、特に子女が心情原理に基づいた成人に達している時、父母にたいして真の子女になるための、子女としての役割もあります。理想的には、父母が子女を生むために一緒になる前に、彼らは個性完成に達しているはずであり、そしてその後も、彼らは個体および共同的レベルで常に完成された状態を維持し続けると期待されています。にもかかわらず、父母が天の父母と完成された状態を維持することは人間の責任分担であるため、天の父母は、彼らが心情原理に基づいた真の愛に合致した選択をしているかどうかを干渉し、指摘することはできません。

すなわち、父母が思いがけなく非原理的な選択をするかもしれないという可能性がたねにあります。そのような場合、もし子女がすでに心情原理に基づいた成人になっていたなら、子女は天の父母の絶対的価値基準のために、父母が心情原理に基づいた真の愛を実践するように干渉することによって、父母にたいしてのみならず、天の父母にたいしても真の子女であるべきです。父母の選択に代わって子女が選択に参加することは常に可能です。何故なら、絶対的基準はすでに永遠に存在していて、それは天の父母が創造した全被造世界に基づいている、根本思想の基台だからです。

実際のところ、長い目で見れば、心情原理に基づいて成人した子女が父母の選択に干渉することは、子女自身および共同体レベルで彼らの血統に役立つでしょう。父母の非原理的な選択が復帰されないままになっているとしましょう。その後、父母が霊界に行くとき、人間の完成は地上でなされなくてはならないために、彼らは子女と子孫たちに蕩滅の重荷を残すことになり、共同体のレベルでその問題を復帰する苦難を受けます⁽⁶³⁾。

創造目的に関する天の父母の絶対的価値基準は、人間の責任分担を含めて、絶対的で永遠です。従って、ひとたび人がそれを知った以上、自身をチェックするだけでなく、父母や他の人たちが心情原理に基づいた真の愛の選択をするように助言することによって、注意深くその基準を守らなくてはなりません。そうすることによって、子女は人間の父母の真の子女であるのと同様に、天の父母の真の子女であることを確信します。

5番目の役割は三大祝福の3番目の祝福に関係があります。それは被造世界全体、すなわち二重の霊的および肉的世界に対して正しい管理を行う、真の主管主になることに関しています⁽⁶⁴⁾。まず肉的世界と異なり、霊的世界は、心情原理に基づいた真の愛の上に、天の父母の法と秩序が最高に統治する、時間と空間を超越した永遠の世界です⁽⁶⁵⁾。さらに、霊的世界は、霊人体(生心と霊体)のみの被造物の中で最高の存在である天使を有しています。天使は心情原理と神の意志を理解する最高の知性を持っており、そして周知のごとく、アダムとエバに起きたように、彼らは性的に人間を誘惑することさえできます⁽⁶⁶⁾。

天の父母の創造過程の進行が単純なものから複雑なものへと進歩的で漸進的であるとすれば、二重の霊的および肉的世界を代表する人間が、宇宙のすべての要素の総合実体である

ように、霊人体のみの被造物の最高の存在である天使は、霊的世界の総合実体であると推論することができます(67)。そして、霊界を主管するということは天使を主管するということになります。

霊的世界と異なり、肉的世界は時間と空間に制約され、天の父母が95パーセントの創造の責任分担の一つとして天の父母が樹立された自然法の下で機能しています。自然界は平衡が維持されるように造られ、肉的世界における多様な種類の被造物がすべて、彼らの生活環境に影響を与える、包括的で、自然に合っている、共同体システムの下で、最もバランスよく、調和的に存在しています(68)。

しかし、霊人体のみの被造物の最高の存在である天使と異なり、動物のような肉身のみの被造物は、天の父母の創造目的を理解する最も高い知性を持っておらず、また肉的世界を管理して、その自然のシステムがどのように動くのか理解することはできません。従って、霊的な実相に関する天の父母の内的な知性と、科学と自然界の動きに関する外的な知性の両方を本来与えられている我々人間は、肉的世界を監督する真の主管者、すなわち真の支配人とならなければなりません。人間は、そこに生きる万物が、いかなる害も被らないで、存在し続けて、それらの創造目的を成し遂げるように、天の父母によって始められた自然の平衡を守らなければなりません。

天の父母が1人の人間だけではなく、1人の男性と1人の女性で創造の役割を終えた理由

この時点で、天の父母がなぜ一人の人間だけではなく、アダムとエバという一人の男性と一人の女性で創造の役割を終えたのかを論じることは適切です。天の父母がなぜそうしたか理解する手がかりは、人間の価値の意味と、人間が天の父母と共に創造することは何を意味するのか、ということと言及するところに一度戻ります。まず、すでに述べたように、人間の創造された価値は天の父母の全ての創造の成果、すなわち霊的および肉的世界宇宙総合実体相としての価値に等しいのです。さらに、人間にとって、天の父母と共に創造するということは、霊的および肉的世界全ての被造物の総合実体としての価値を繁殖することによって、天の父母のみわざを模倣することです。これが天の父母の理想のもとで、人間を繁殖するという意味です。

EDP(『原理講論』)によれば、天の父母の永遠なる創造目的の本来の価値、本来の美、本来の真実、本来の善を増やすためには、創造過程は繁殖の方式に従わなくてはなりません(69)。これは四位基台を形成する正分合作用であり、そこでは天の父母を中心すなわち‘正’の位置として、授受作用がそれらの四つの位置の間のすべての方向で自由に行われ、動的な円環(楕円形)または球形の存在様式を実現しながら、さらなる増殖に向かいます(70)。

EDP が説明している、四位基台の一つの例が、神を‘正’とし、夫と妻を‘分’とし、子女を‘合’とするものです。それらは、天の父母の本来の絶対的価値——本来の真善美——に基づいて、あらゆる方向の授受作用を行います。ひとたび、そのような天の父母を中心とした四位基台が確立され、すべての関係が自由に進んでゆけば、それは人間を含めた被造物のさらなる繁殖をもたらすでしょう。

さらに、四位基台を評価するのに、天の父母の‘正’の位置の数的表現に関連して、それぞれの位置の数的価値を考察する必要があります。すでに述べたように、創造以前の‘正’の位置にある天の父母が存在において唯一者であるように、その位置を表す数的価値は「1」でしかありえません。

四位基台の他の3つの位置については、永遠の創造目的がその数的価値が「1」である唯一無二の天の父母に似ることであるため、すべての被造物、すなわち3つの位置のそれぞれは、同じく、それぞれの個体レベルで「1」の数的価値を持っていないなければならないということになります。つまり、天の父母を‘正’として、夫(男)と妻(女性)を‘分’として、子女を‘合’とする四位基台の場合、男性と女性のそれぞれの創造的価値は「1」であり、同じであるのは疑いありません。

四位基台の‘分’のレベルにおいて、一つの重要な注釈がなされなければなりません。永遠の創造目的が、同一の実体をクローンすることではなく、個々に独立した実体、すなわち個性真理体——それらは同時に、天の父母の下での被造世界である全体のあらゆる部分を構成している——を創造することであることを明確にすべきです(71)。

これは相対的な‘分’のレベルにおいて、二つの間に共通性だけでなく差異性があることを意味します。どちらも唯一なる天の父母から生じるため、それらの間に共通性がなければなりません。同時に、永遠の創造目的は同一の被造物を複製することではないので、差異性もあるはずです。

ところで被造物には、霊人体だけの存在、肉身だけの存在、そして霊人体と肉身の両方を持った人間の3つの異なるタイプがあり、相対的な‘分’における作用は、異なる被造物の間でなされることはできません。例えば、相対的な‘分’の位置において、人間の男性と雌の動物、あるいは人間の女性と雄の動物をペアにすることはできません。

天の父母が、一人の人間だけでなく、男性と女性という、それぞれが被造物の総合実体としての共通の人的価値をもちながら、性別においては異なる二人において、創造の役割——6段階の創造過程における95パーセント——を完了されたのには理由がありました。その中で彼らは、異なる性別でありながら、同等な価値を持たれておられる天の父と天の母である天の父母に似ます。

さらに、永遠の創造目的が人間と共に創造することであるから、天の父母は創造の役割を一人の人間だけで終わるのでなく、男性と女性で完了されたのですが、それは四位基台の増殖運動を行って、彼らが子女の創造(繁殖)を始めることができるようにするためです。そして彼らの子女たちは、永遠に、血統を通じて同様な理想的な人間の繁殖プロセスを継続するので、言いかえれば、もしたった一人しかいなければ、人類を生じた、四位基台の運動を通じて、宇宙の総合実体相としての価値を持つ存在を繁殖する永遠のプロセスは可能ではなかったのです。

4. 人間の墮落と原罪

『原理講論』と統一思想は、共通に、主に墮落の性的な意味と、‘[墮落した]血統を理想的なものに変える’ためにアダムとエバの位置を代表する救世主の夫妻、すなわち‘真の父母’の必要性に焦点を置いています。著者は、三大祝福の5つの役割を成し遂げることによって、天の父母と共に創造する5パーセントの人間の責任の見地から、原罪の概念を追求します(72)。共同の創造において、必ず心情原理に基づいた人間の性が問題になります。

さらに、人間の責任が個体および共同体レベルの二重の位置であるため、私は、アダムとエバが共同体レベルでともに犯した罪と、男性と女性の人類にそれぞれ異なる影響を与えた彼らの明らかに異なる個人的に犯した罪とを区別するという立場から、人間の墮落の示唆する意味を追求します。アダムとエバの罪を個体および共同体共同的レベルに分けたときのみ、我々は明らかにエバの個体レベルの‘二重の罪’が、なぜ、男性に影響を与えず、彼女の娘や女性に恐ろしくひどい影響を与えたのか、そしてその不平等を通じて、女性の位置を男性よりも下げ、さらに天の父と天の母の等しい顕現を妨げることさえなされた理由を見ることができます。

アダム、エバとルーシエルの性的な墮落

聖書では、エバと霊的存在であるルーシエルとの霊的な性関係と、それに続くもう一人の人間であるアダムとの霊的、肉体的な性関係が象徴的に描かれています。『原理講論』はあからさまに墮落の経緯を描いています(73)。ルーシエル天使長であると特定された聖書の蛇が、エバを誘惑しました。「それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように、善悪を知る者となるでしょう」(創世期 3:3、5)、と(74)。そして、エバが善悪を知る木の実を食べ、すなわちルーシエルと霊的な性的墮落を犯すや否や、彼女はそれをアダムに‘与え’、彼らは一緒に‘食べ’ました。すなわち、ともに霊的、肉体的な性的墮落を犯しました(75)。

天の父母の永遠の創造目的の観点から見ると、様々な被造物が、性的区別を含めて、全く異なる目的のために創造されているために、人間と天使のような、異なる被造物の間に性関

係が絶対あってはなりません。しかしながら、ルーシエル、エバ、アダムの性的な墮落で起きたことは、まさに異なる種類の被造物の間の性関係であり、それはその後、天宙的四位基台の心情原理に基づいた秩序に対する破壊的な結末をもたらすことになったのです。

ルーシエル天使長がエバに、自分と性行為をするように誘惑したとき、彼女は10代で未熟であったけれども、彼女はすでに下位の被造物と性行為をすべきではないことを知っていました。なぜなら、それだけはすでに天の父母によって教えられていたからです。彼女の成長期の中に、成長の各段階を適切に教えることは天の父母の95パーセントの責任であったので、天の父母は徹底的に彼女に関わったことでしょう。

しかしながら、エバに、下位の被造物と性行為をしてはいけないと教えることは天の父母の親としての95パーセントの責任でしたが、いつ、どこで、どのようにルーシエルが彼女の誘惑を企てるかについては、それはエバの5パーセントの責任分担に干渉することですから、天の父母は決してエバにあらかじめ警告することはできませんでした。エバは彼女が天の父母から学んだ絶対的価値基準を実践し、下位の被造物ルーシエルの非原理的な誘惑に抵抗すべきでした。

ルーシエルに従うのではなく、エバはいかにしてこの状況に対処すべきか、心情原理に基づく知恵を得るために、まっすぐ天の父母のところに行くべきであり、天の父母にルーシエルをまかせるべきでした。エバは、天の父母に対して真の子女ですから、天の父母の方を向いて、最良の心情原理に基づいた選択をすべきであり、天の父母は人間の尊厳性と永遠の創造目的のための適切な価値を維持するように彼女を導いたであろうことは間違いありません。

エバが性的にルーシエルと墮落した後、より下位の被造物との性的な罪に対する蕩滅を支払わないまま、彼女はアダムのところに行って、彼を誘惑しました。アダムが、彼女に誘惑されることにより、男性と女性の両方の側で完結的な人間の墮落がなされてしまいました。この時、アダムもまた重大な間違いを犯しました。墮落したエバがアダムのところに来たとき、アダムはエバに従っていくのではなく、彼女にその状況を解決するための心情原理の知恵を探すために、天の父母のところに行くべきであることを、エバに悟らせることによって、アダムは彼女に対して真の兄であり、真の未来の配偶者となるべきでした。しかしながら、アダムもやはりその基準に従って行動するのに失敗し、エバとともに性的な罪を犯して、さらに墮落の事実を複雑にしました。

より下位の被造物と人間の男女を巻き込んだこの一連の性的関係の最終結果は、エバが性行為を通じて天使長ルーシエルから受け取った非原理的な要素が、同様にアダムに伝達されたということでした。すなわち、彼らを通じて生まれて来るすべての人類を代表しているアダムとエバの霊人体と肉身の両方が、その過程で非原理的な要素に汚染されました。

性は、パートナーを一つにするだけでなく、性行為の最終結果として、共同体レベルでの血統に関係します。その状態から復帰するための蕩滅が全く支払われないうまま、アダムとエバを通じて生まれる人類は、アダムとエバと下位の被造物である天使長ルーシエルとの非原理的な性的罪に、共同体レベルですでに巻き込まれていたのです。

ルーシエル、エバ、アダムの間の非原理的な性関係は結果をさらに複雑にしました。性は共同体レベルでパートナーと彼らの血縁を一つにするため、たとえアダムとルーシエルとの間に直接の性関係がなかったとしても、ルーシエルとアダムの二人の男性と性関係を持ったエバを通じて、アダムはもう一人の男性であるルーシエルと間接的な性関係を持った立場に立つことになりました。

つまり、二人の男性と一人の女性を巻き込んだ非原理的な性行為を通じて、ただ異なる目的を持っている、異なる被造物の間の非原理的な性関係の可能性が現実となっただけではなく、同性愛すなわち同性の間の非原理的な性的可能性が、天使世界と人間社会の両方に現れたということになります。

原罪は、三大祝福のすべての5つの役割を果たすことについてのアダムとエバの失敗であった

実際、アダムとエバの原罪は三大祝福のすべての5つの役割を実現することについての彼らの失敗でした：

まず第一に：彼らはそれぞれ、天の父母の真の子女になるという義務を怠りました。すなわち、彼らは第一祝福を成し遂げるための個性完成に失敗し、天の父母と心情原理に基づいた真の愛による一体化の中で常に結ばれている、完全で、理想的な人間になるのに失敗しました。

第二に：アダムとエバは、ともに互いに真の兄と真の妹になることに失敗しました。21歳の個性完成の年に至る前の彼らの成長期間に、アダムとエバは、お互い兄と妹として、性的な関係を持つことは許されませんでした。なぜなら、人間の性は本能的な満足のためだけにあるのではなく、天の父母の完全な似姿としての、創造の最も高位である人間を創造するという究極の目的のためのものだからです。アダムとエバの性的な交わりは、彼らが21歳までに個性完成に達して、天の父母から結婚の祝福を受け取った後でなされるべきでした。その間、一方が非原理的な選択をする場合、心情原理に基づいた真の愛の知恵のために、彼または彼女が天の父母の方に向くように、常に気を配りながら、彼らはお互いに真の兄と真の妹でなければなりませんでした。

第三に: アダムとエバは互いに真の配偶者になる資格を失いました。まず、彼らは、天の父母から与えられた配偶者を迎えて、結婚の祝福を受け取る資格のある成人として成熟する前に墮落したために、彼らは互いに真の配偶者としての資格を与えられる場に立つ機会さえ持てませんでした。

彼らが墮落して、彼らの墮落した血統を繁殖し始めた後でさえ、彼らは互いに真の配偶者となり、共同で彼らの子供たちに対して真の父母になるために、まず個人的に完成するように、天の父母から心情原理に基づいた知恵を取り戻そうと努力するべきでした。にもかかわらず、彼らが自分自身を完成し、真の配偶者の位置を得るのに失敗したとき、彼らは、カインとアベルを含めた、彼らの子女たちに対して真の父母になることにも失敗しました。

第四に: 上述したように、アダムとエバは彼らの子女たちの真の父母になることを怠りました。父母としてのアダムとエバが、完全な人間を繁殖することができる、個性完成をなした子女を育てるためには、当然、彼ら自身が個性を完成した成人にならなければなりません。しかしながら彼らは心情原理に基づいた真の愛の基準の、完成した理想的な成人に成熟しませんでした。その代わりに、より下等な被造物のルーシエルと墮落して、彼らは肉身のみの被造物より低い人間の価値になってしまいました。

その結果、彼らを通じて生まれる子女たちを、天の父母でなくて、人間の価値より低い被造物である墮落した天使へと結びつけるという、考えられない大罪をもたらしました。さらに、アダムとエバの異なる個体の罪のために、彼らは、共同体レベルにおける、男性と女性の不平等な位置、およびカインとアベルの不平等な位置をもたらしました。そしてそれは人類全体における、因習となりました(76)。

第五に: 第三祝福を全うして、天の父母によって与えられた人間の価値を得て、他の被造物にたいして真の主管主になるのではなく、墮落の行為によって、アダムとエバは、人間の価値を肉身のみの被造物や霊人体のみの被造物の価値より貶めてしまいました。アダムとエバが人間の性に関する天の父母の絶対基準を無視して、霊人体のみの存在である天使と姦淫したとき、彼らはそれによって神の心情原理を理解する能力のない、肉身のみの被造物の本能的な性をまねるようになりました。これは他の被造物——霊人体のみの存在、肉身のみの存在にかかわらず——よりも人間の価値を下げる条件になりました。

さらに、本能的な性により、肉身のみの存在の下に落ちることにより、アダムとエバは、人類に天の父母の有する外的、内的知識を失わせました。霊的世界の知識と霊的感覚を無くして、墮落した人類は天使をあがめるようになりました; そして肉的世界がどのように運行しているか、明確な理解を無くして、墮落した人類は、天の父母が肉的世界に与えた自然の平衡を配慮し、維持する、真の主管性を失いました。

5. 墮落と原罪のさまざまな結果

ルーシエルが天の父母の位置を占有すると主張した結果、天の父母の宇宙的四位基台の理想が崩壊した。

天使長ルーシエルとアダムとエバの非原理的な性行為は被造世界全体、すなわち霊的および肉的二重の世界を表す宇宙的四位基台に最も大きな破壊をもたらしました。宇宙的四位基台において、天の父母は‘正’の位置です；‘分’の位置は最も高位の天使を含んだ霊のみの霊的世界と、最も高位のものが動物である肉身のみの肉的世界です；そして‘合’は全被造物、すなわち二つの世界の宇宙総合実体相である個々の人間です。

まず、性的な行動は人間と肉身のみの被造物たちが、快感のためだけでなく、繁殖の目的のためになされるものです。しかしながら、主に‘自己認識と決定をほとんど必要としない物理生物遺伝子プログラミング’に従って存在していて、性的な道徳基準を感じるできない本能に駆られた肉身のみの被造物と異なり、人間は性行為の重要性と結果に関して心情原理に基づいた判断をすることができ、またそうしなくてはなりません(77)。

したがって、より下位の被造物と非原理的な性行為をしてはならないと明確に規定されている人間の性に対する心情原理に基づいた基準を放棄すれば、彼らは、彼らの創造された価値を、肉身のみの被造物たちより低いレベルに低めるのです。その位置が、肉身のみの被造物たちより低いのは、肉身のみの被造物が、人間の基準からすると、無秩序で無差別に見える性行為によって、彼らの肉体的な種を本能的に繁殖させるとき、肉身のみの被造物たちは彼ら自身の創造された価値を下げないからです。彼らは単純に、人類の創造目的とは異なる彼らの創造目的、すなわち本能的な手段を通じた種の繁殖に従っているだけだからです。

ところがアダムとエバは、他の被造物に対して真の主人または真の主管者であるべきであり、それは肉身のみの被造物から進化した、我々の本能的で、情欲に駆られた自らの肉身に対して真の主人となることから始まるのです(78)。ところが、人間の性に関して天の父母から、彼らは肉身の主人であるべきであるという心情原理に基づいた教育を受けたにもかかわらず、アダムとエバは、それを知りながら、神の心情原理に従わず、肉身のみの被造物を真似て、人間の性に関する天の父母の絶対的基準に適わない性行為を行ったのです。

さらに、より下位の被造物であるルーシエル天使長との彼らの非原理的な性的な結合を通じて、天の父母を人類の究極の父母として崇めるのでなくて、彼らは人間の血統を天の父母にではなく、ルーシエルに結びつけました。イエスが「あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者である」(ヨハネによる福音書 8:44)と述べたように、まさに人類の父母として来られる天の父母の位置に、ルーシエルを置いたのです。

すなわち、アダムとエバは、彼らから生まれる人類を、彼らの本能的な行動によって、肉身のみの被造物より低い位置に立たせるだけでなく、その代表者が天使である霊的な被造物よりも低い位置に引き込みました。これは宇宙的四位基台の秩序と調和に破壊と混沌をもたらし、人間完成を通じた永遠の創造目的の理想的な完成に対する希望を天の父母から奪いました。

エバのより大きな罪が女性の位置を低めた

人類の悲運をもたらしたアダムとエバの墮落のもう一つの真に残念な結果が男性と女性の不平等の問題です。すでに述べたように、数の観点から言うと、男性と女性の創造された価値は、「1」の数的価値をもつ一人の完全な人間を作り出すための家庭的四位基台を形成するために、本来、それぞれ「1」でなければなりません。「1」の数的価値をもつ起源の唯一者である天の父母から始まり、「分」のそれぞれの位置——被造物の総合価値を持っている夫と妻——は「1」の数的価値を所有しなければならず、そうして彼らは一体となり、等しく「1」の数的価値を持つ子女を彼らの「合」の結実として創造することができるのです。

アダムとエバは、最初の男性と女性として、彼らを通じて生まれてくる男女の人類を天の父母に結ぶはずでした(79)。しかしながら、アダムとエバがそれぞれ異なる個別の罪を犯したとき、彼らを通じて生まれてくる男性と女性のそれぞれの運命も同様に、共同のレベルで必然的に不平等になりました。

天の父母の永遠の創造目的は、すべての被造物が二重の個体および共同体の位置の責任分担を持つことを求めます。それ故、天の父母は必然的にアダムとエバの個体レベルでの罪を、彼らの共同体レベルの責任から分離しなければなりません。性的な結合がパートナーを一つにするために、共同体レベルにおいて、アダムとエバと天使長のすべてが、霊的、肉的二重の世界において宇宙的四位基台を崩壊させた墮落の罪を共有します。

しかしながら、個体レベルにおいて、エバは天の父母の祝福がないにもかかわらず、ルーシエル天使長と彼女の将来の配偶者であるアダムという二人の性的パートナーと非原理的な性的関係をもつことによって二重の罪を犯した張本人であったために、エバはアダムよりもっと責任がありました。一方、アダムは、不注意に墮落したエバに従いはしたものの、墮落したエバと非原理的な性行為を行っただけでした。従って、彼の罪は二重の罪ではなく、一つの罪でした。

人間の価値に関して言えば、男性と女性の不平等は決して天の父母の永遠の創造目的ではありませんでした。それ故、もし男性と女性に異なる影響を与えた個体レベルのアダムとエバの非原理的な、罪深い行為が償われなければ、人間は誰も復讐されません。それは、男性と女性の両方の位置がそれぞれ、神の心情原理によって要求されるように、「1」の数的価値を取り戻さない限り、人間は誰も、本来のすべての人間の数的価値である「1」を取り戻さないからです。

これは、天の父と母が最初の人間を創造するための 95 パーセントの責任を終えたとき、最初の男性と女性の人間の代表者であるアダムとエバに、来るべき彼らの血族の完成の道を開くために、彼らがそれぞれ個体レベルで彼ら自身を完成し、共同体レベルで完成するために共に歩むことを希望しながら、それぞれに等しい人間的価値を授けたことを示しているのです。

しかしながら、どんなに天の父母が望んだとしても、創造理想を 100 パーセント実現することは人間の 5 パーセントの責任分担にかかっています。アダムとエバが、異なる個体の罪を犯すことによって、完全に非原理的な現実を作ったとき、彼らは、実際、人類の男女が被るそれぞれ異なる運命を招きました。そして天の父母は彼らの行動に干渉することができませんでした。エバがより大きい性的な罪を犯したとき、彼女は来たるべき女性の位置を男性の位置より低くして、女性を貶めました。完全な蕩滅復帰により、男性と女性の等しい価値を保証する天の父母の本然の創造目的が実現されるまでは、その不平等な状態は継続するのです。

アダムとエバが、彼ら自身と男女の子孫にもたらした、不平等な現実により、共同体レベルで人類を汚した彼らの共同体としての罪は言うまでもなく、男性と女性の人類にそれぞれ異なる影響を与えたアダムとエバの個体としての罪が解消されることのできる摂理の時まで、天の父母は、人類の男女のそれぞれにたいしてはもとより、男女の摂理的な中心人物たちにも、同等の関係をもつことができませんでした。

このような天の父母と女性たちとの間の不自然な関係は、アダムの一つの罪によって、男性たちは天の父母の絶対的基準から一段階離れた位置におかれたのに対して、エバの二重の罪によって、エバの娘たちと女性の人類は、二段階離れた位置に置かれたという事実起因しています。

天の父母には、最初の人間によってつくられた現実を甘受するほかありませんでした。天の父と母が、ご自身の完全なイメージに似るようにと、どんなに子女たちの復帰と男女の平等を願ったとしても、中心人物の基台の繰り返される失敗のために、復帰摂理は絶えず延長されました。さらに女性の地位を高めるための中心的な女性たちの貢献がなされなかったこともあります。

なぜなら人間の責任分担を担う中心人物を選ぶときでさえ、天の父母は女性の中心人物に直接関わりを持つことはできず、男性の中心人物と先ず関与した後でしか、関わりを持つことはできませんでした⁽⁸⁰⁾。したがって、男性の中心人物は男性だけではなく、共同体として男性と女性の人類両方を代表している場合が多かったのです。

天の母の人類への顕現は閉ざされた

エバのより大きな罪と女性の低い位置という真に悔やまれる結果は、アダムとエバから生まれる人類が、天の父だけではなく、同様に天の母でもある天の父母を知り、体験する機会を失

ったということでした。天の父母の永遠の創造目的によれば、アダムとエバは、三大祝福のすべての5つの役割の成就を通じて、被造物の最も高位の人間の子女を生み、育てるはずでした。これらの役割の中に、アダムとエバが彼らの子女や、彼らを通じて生まれる人類に対して、完全な模範になることによって、真の父母になるというのがありました。

彼らは、天の父母が誰であるか、そして天の父母の永遠の創造目的が人間にとって何であるかに関して、子女たちを教育したことでしょう。最初の男性であるアダムは、天の父の姿を現す位置にいました。そして最初の女性であるエバは、天の母の姿を現す位置にいました。アダムとエバの子女たち、すなわち人類が、天の父母が性のバランスがとれた天の父と天の母であることを学ぶことができた唯一の方法は、アダムとエバの両方が、完全に、完璧に、それぞれ天の父と天の母を現すことでした。彼らは、彼らの個体および共同体としての人間の責任分担を成し遂げることによって、それをなしえたはずであり、従って平等な人間の価値を実現したはずでした。

しかし人間の墮落が起き、その結果として、エバと彼女の娘たち、すなわち女性の人類がアダムと彼の息子たち、すなわち男性の人類より低い位置に下げられたとき、天の父母の天の母の側は、主体格位にある天の母にたいする対象格位(女性の人類)と統一思想が呼んでいるものを失いました(81)。結果として、天の母の存在は人類に明らかにされることができませんでした。

墮落した歴史において、男女の人類それぞれに異なる影響を与えたアダムとエバのそれぞれ異なる行為が解消されなかった間、人類は天の父母の天の母の側を知ることができませんでした。天の父母のアイデンティティーの半分が覆い隠され、主として天の父母は、人類に対して、天の父だけとして不完全に表現されました。この悔やまれる状況において、天の母は彼女の子たちとの関係を失った位置に置かれました。

そして、彼女の子たちは彼女の存在を認識さえしませんでした。その状況は天の母にとって、まことに苦しく、悲痛なものでした。少なくともアダムとその後の男性たちの、罪のより軽い位置を通じて、天の父は人類と関係をもつための先有基盤を持っており、人類は天の父に対応しました。つまり、天の父は天の母と比べて、はるかに少ない心痛を経験しました。他方、天の母は、エバと人類の女性の中に誰ひとりとして相対者を見出すことができず、彼女が存在しており、子女たちと交わることを望んでいることを子女たちのだれも知らなかったという、悲痛な洪水のような涙をたえず流しながら、‘歴史的な苦しみ、悲しみ、痛み’を受けてきたに違いありません(82)。

6. 復帰歴史における性の平等に向けた遅々たる前進

中心人物たちが繰り返し、性の平等を復帰するのに失敗した

アダムとエバの墮落は、天の父母の創造理想を妨害し、天の父と天の母としての天の父母の完全な姿を現せなくしたにもかかわらず、人間と共に創造する天の父母の永遠の創造目的は変わりありません。従って、天の父母は、その後続く中心人物の基台が復帰を完了するのを、悲しみの中で待つしかありませんでした(83)。それにもかかわらず、われわれが復帰歴史から知るのには、中心人物の責任分担の失敗の繰り返しとそれによる延長でした(84)。

そして、個体および共同体レベルの両方における人間の責任——天の父母と共に創造する人間の5パーセントの責任分担——の遂行を見れば、われわれはアダムとエバの家庭の後、それぞれの中心的基台において、繰り返し共同体としての基台を実現するのに失敗し、個体としての基台さえも完成するのに失敗したことに気づきます。たとえ男性の中心人物が彼の個体としての基台を完了したとしても、男性の中心人物と並んで、女性の中心人物が個体としての基台を成就しなければ、個体としての基台は不完全なままでありました。

エバの二重の罪とは対照的に、アダムの罪はただ一つだったために、天の父母が一定の摂理的時期において、それぞれの中心人物の基台に着手した時、天の父母は、まず初めに男性の中心人物に関わる以外に選択肢がなかったことを我々は理解します。これは蕩滅路程が逆のコースになったことによるものでした(85)。

だがしかし、ひとたび男性の中心人物が呼ばれて、天の父母と誓約したならば、彼は彼の妻に、天の父母に至るために彼女の個体としての責任を成し遂げるように警告することによって、彼の妻に対して真の配偶者になることが彼の責任となりました。彼は、心情原理に基づいた知恵でもって、人類の男女の平等と、天の父であると同時に天の母である天の父母にたいする人々の理解を高めて、天の母の側に貢献するための摂理的な努力をするように、彼女を励ますべきでした。

例えば、ノアと彼の妻の家庭は、天の父母が再び摂理を世界的、宇宙的レベルの基台に繋げるために、中心的な家庭と共に働き始めることができた摂理的瞬間であったことを意味する、‘人類の2番目の先祖[家庭]’であったと『原理講論』に記述されています(86)。しかしながら、アダムとエバの家庭の場合と同様に、ノアの家庭は三大祝福のすべての5つの役割の個体および共同体レベルの二重の位置の完成を成し遂げられませんでした。したがって、原罪からの完全な復帰はなされませんでした。実際、個体レベルでノアは‘義人’として描かれています(87)。

しかし、ノアが、妻にたいする真の配偶者となり、彼の妻が個体レベルの基台をなして、女性の側に貢献することを助けた、わずかな形跡もありません(88)。実際、彼の妻の名前は聖書に

記録さえされず、それは彼女の信仰のレベルを示唆しています。さらに、共同体としての家庭レベルにおいて、ノアと彼の妻が、カインとアベルの位置にある彼らの息子のセムとハムが復帰の目的のために摂理的な役割を果たすのを助けるために、真なる父母として協力したことを示すものは何もありません(89)。

まとめると、ノアと彼の妻の家庭は男性と女性の平等な価値の復帰を実現しませんでした。彼らは三大祝福のすべての5つの役割を果たしませんでした。彼らは原罪からの復帰を実体化しませんでした。それ故、彼らは、心情原理に基づいたカインとアベルの位置の真の愛の統一を実現する、人類の代表となることができませんでした。

ノアと彼の妻の家庭の失敗は世界的、宇宙的レベルでありました。それ故、天の父母が世界的、宇宙的レベルの基台を復帰させるための次の役事を願う前に、墮落した人類を取り戻す天の父母の摂理は長い道のりを行かなければなりませんでした。やがて、墮落した人類に氏族と国家の分裂が起き、それらは新しい蕩滅条件を生じました。人類の氏族と国家の分裂と呼ばれるものは決して永遠の創造目的ではありませんでした。

本来、世界の人類はアダムとエバの家庭、あるいはノアと彼の妻の家庭から拡大して、神の下で一つの家族となったのです(90)。最初の人間の父母であったアダムとエバは人類全体の父母となったでしょう。ところがアダムとエバの家庭とノアと彼の妻の家庭が、家庭レベルで心情原理に基づいた真の愛の統一を達成するのに失敗した後、彼らの共同体としての拡大である人類に分裂が生じました。

それ故、天の父母が、イエスと彼の花嫁の時に訪れる世界的、宇宙的レベルの復帰を再開する摂理の時を望むことができる前に、天の父母はまず、氏族と民族レベルに取り組みなければなりませんでした。たとえそれらのレベルが、人類と全被造物の世界的、宇宙的レベルに影響を与えたアダムとエバの家庭とノアと彼の妻の家庭の失敗をまだ完全に回復させることはできなかったとしても、天の父母は墮落社会の人間の5パーセントの貢献を受け入れること以外に選択肢はありませんでした。

その当時、氏族としての基台のアベルの位置にあったのは、アブラハムとサラの3世代(第一世代のアブラハム、ハガル、サラ、第二世代のイサクとリベカ、そして第三世代のヤコブ、レア、ラケル)でした。しかしながら聖書とEDP(『原理講論』)が男性の中心人物であるアブラハム、イサク、ヤコブの個体的な努力を認めているのにたいして、神の摂理を支え、女性の側に貢献する個体としての個体としての努力をしたサラ、リベカ、ラケルの中心的な女性たちに対しては、極めて少ししか述べられていません(91)。

ところで、共同体としての責任においては、第1世代のアブラハムとサラ、第3世代のヤコブとラケルは共に、カインの位置に立つ妻であるハガルとレアを、彼らの家庭的基台に迎えることによって、カイン・アベルのそれぞれの位置に立つ妻たちに生じた分裂に責任がありました。

カインとアベルのそれぞれの位置に立つ妻たちの間の分裂は、アダムとエバの家庭あるいはノアと彼の妻の家庭には存在しなかった全く新しい非原理的な事態でした。先に論じたように、四位基台のそれぞれの位置の数的価値は必ず「1」でなければならないのであって、男性と女性の価値はそれぞれ「1」でなければなりません。

しかしながら、2人の女性(アブラハムの場合、ハガルとサラ)あるいは4人の女性(ヤコブの場合、レア、ラケル、そして彼らの召使のジルパとビルハ)を「1」の数的価値を持つ妻の位置に入れて、彼女たちが子女を生むとき、それは単にそれぞれの女性を低くなった数的価値(2人の女性の場合はそれぞれ「0.5」、4人の女性の場合はそれぞれ「0.25」)の状態に下げただけではなく、それぞれの母から生まれた子供たちにたいして、本来の人間の価値を取り戻すために本来必要としない蕩滅の重荷を与えたでしょう(92)。

実際、アダムとエバという同じ父母をもつカインとアベルの間でさえ、あまりにも多くの試練があったのに、複数の妻がカインとアベルのそれぞれの位置に分裂した子供たちにどれほど、多くの苦難を与えたことでしょうか。

要するに、アブラハムとサラから始まった3世代の氏族レベルの基台の間に、女性の側に貢献する中心的な女性たちの個体としての基台は多くありませんでした。共同体レベルにおいては、家庭と氏族レベルの基台を統一するための、より大きな心情原理に基づいた真の愛の統一がなされるのではなくて、かえってそれぞれのカイン・アベルの位置に立つ妻たちの間と、異なる母親たちから生まれたそれぞれのカイン・アベルの位置に立つ子供たちの間に、新たな蕩滅条件が生まれると共に、より大きな亀裂ができました。

かくして、氏族レベル基盤の3世代の間に、女性の位置があまり向上しなかっただけでなく、三大祝福の5つの役割のいずれも全く実現されず、さらにカイン・アベルの位置の間に心情原理に基づいた真の愛の統一も実現しませんでした。

アブラハムの象徴献祭の失敗が、彼とサラの子孫をエジプトにおける430年の奴隷としての苦しみをもたらしたのですが、天の父母はアブラハムとサラの血統のイスラエル民族と共に摂理を続けなければなりません(93)。蕩滅期間の後に、天の父母は、イスラエル民族をカナンに連れて帰り、国家的レベルの基台をつくるために、男性の中心人物としてモーセを立てました(94)。しかしながら、カナンに戻るために21日の路程であるべきであったのが、荒野40年の流浪に延長され(95)、第一世代は、中心的リーダーであるモーセと同様、カナンに入ることはできませんでした(96)。ただ二世だけがカレブとヨシュアの指揮の下で入りました(97)。

国家的基台における中心人物として、モーセと彼の家族は一定の基台を確立しなければなりません(98)。しかしながら、モーセは、アベルの位置の血統であるイスラエル民族の女性と結婚さえできず、代わりに世界的なカインの血統のミデヤン人の女性と結婚しました(98)。しかし、妻チッポラは、彼女の以前の信仰から離れ、当時、イスラエル民族として必要な蕩滅条件

であった割礼を受けることによって、彼女自身をイスラエル民族のアベルの血統に結び付けるための重要な意思表示をしました(99)。

しかし結局、チッポラの条件的な献身とモーセの個体レベルの努力にもかかわらず、個体および共同体レベルでの彼らの統合された努力は、女性の地位を改善するのにも、三大祝福のすべての5つの役割を果たすのにも、国家的レベルにまでカイン・アベルの間の心情原理に基づいた真の愛の統一をなすのにも、十分ではありませんでした(100)。

その後、再び世界的、宇宙的レベルの基台を築くための摂理的な時であったのはイエスと彼の花嫁の路程でした。彼らの路程は、アダムとエバの家庭、ノアと彼の妻の家庭、そしてその後のすべての中心的基台の時に起きたすべての失敗を復帰させる好機を持っていた、新たな‘人間の先祖’の路程でした(101)。

しかしながら、絶対的基準の見地からみると、イエスと花嫁の路程の結果は、完全な失敗ではありませんが、完全な成功でもありませんでした。新たな世界的、宇宙的レベルの路程として、イエスと花嫁は、個体および、さまざまな共同体レベルで三大祝福のすべての5つの役割を果たして、原罪を蕩滅復帰しなければなりません。それにより、すべてのレベルにおいて、人類を悩ませていた男性と女性の平等な価値の回復と、カイン・アベルの不平等な地位の解消が、あらゆるレベルにおいて、必然的にもたらされたことでしょう。

しかしながら、イエスは花嫁と結婚することができる前に、早々と殺されたので、不可避免的に本来の使命を完成することができなくなりました。人間の完成がなされるべき肉的世界で、肉身が生きていることが必要でしたが、イエスが死の可能性に直面するときまでに、すべての共同体レベルの基台は失敗していました。イエスの家庭を中心とした基台、すなわちザカリヤと彼のそれぞれカイン・アベルの位置に立つ妻であるエリサベツとマリヤ、彼らのカインとアベルの子供である洗礼ヨハネとイエス、そしてイエスの弟子たちの基台です(102)。

実際、その時点で、人は自由意志を行使することができたので、もしイエスが、彼と花嫁の路程の摂理的な重要性に関して個体レベルで信仰を失っていたなら、たとえ彼が当面の死を避けられたとしても、彼は完全にその時、人間の基盤を失ったことでしょう。もしそうになっていたなら、それは個体および共同体レベルにおける世界的、宇宙的レベルでの完全な、徹底的な失敗になったことでしょう。そのような場合、アダムとエバと彼らの家庭の失敗の後とまさに同じように、神の摂理は、人類のすべてが蕩滅をしなければならないという、また別の路程を辿ったことでしょう。

すべての共同体レベルの基台が失敗し、彼の肉身が犠牲となったとしても、少なくともイエスは個体レベルで彼の信仰を保持しました。イエスのこの最後の行為は人間の責任にとって最小の貢献をすることを可能にしましたが、それは個体レベルの男性の側だけであり、肉身のないイエスによる霊的レベルでなされただけでした。

そのように、イエスと彼の花嫁はその時、世界的、宇宙的レベルまで完全な勝利はできなかったけれども、男性の中心人物であるイエスが個体的な男性の側と霊的なレベルで、一定の基台を確立しました。この彼の最後の行為によるギリギリの選択によって、彼と花嫁の路程が2千年の蕩滅の後に、再臨主とその花嫁の路程に延長することを可能にしました(103)。

このようなイエスと花嫁の路程の最終結果により、以下の重要な問題が不可能になりました。: 男性と女性の平等な価値の復帰、三大祝福のすべての5つの役割の成就と原罪からの復帰、アダムとエバの家庭の失敗からずっと人間社会を苦しませてきたカインとアベルの不平等の解消、そして二重の霊的、肉的世界を治める真の主管者である完成した人間による、天の父母に被造世界を帰するための転倒した宇宙的四位基台からの復帰です。

要するに、男性と女性の不平等な地位が、アダム・エバの墮落行為におけるエバの二重の罪に起因して生じた時から、再臨主と彼の花嫁との路程の時まで、本来の男女の平等を回復するための女性の側の基台はほとんど造られていませんでした。蕩滅歴史の間、天の父母はまず男性の中心人物と関わることによって、すべての摂理的な基台を始めざるをえなかったもので、男性の中心人物が天の父母とたえず接しながら個体的基台を維持するのは、女性の中心人物に比べてずっと簡単でした。

一方、女性の中心人物たちは不利な状況におかれ、共同体レベルにおいて、エバの‘二重の罪’による‘二重の重荷’を課せられました。さらに、彼女たちは天の父母と直接に関わることによって彼女たちの路程を始めることはできず、配偶者を通してのみ始めることができたために、彼女たちの位置に願われた摂理的期待に沿って行動することは極めて難しかったのです。男性と女性の間この不均衡な現実という条件のもとで、男女はそれぞれ天の父と天の母の代表者でなければなりません。従って、天の母の側も、彼女自身の子女である人類から遠ざけられ、無視されて、心をねじ曲げるような苦痛を感じながら、全く悲惨な状況におかれたのです。

アニミズム(精霊信仰)から、豊穡の女神、そして男性の唯一神へ

墮落した人間の神性に対する理解は、摂理歴史における人間の責任の動向を反映しました。墮落の後、アダムとエバの血統は、天の父母だけではなく、より下位の被造物の血統も含めて多様になりました。多神教の崇拝はその多様性を反映しました。墮落が宇宙的四位基台の破壊を招き、人間は肉身だけを有する被造物の下に置かれたために、人間は自身の価値を低く見るようになりました。それ故、原始世界の人々は、人と動物を区別しなかったばかりでなく、彼らの神のイメージは、彼らが畏敬と崇拝の対象と見なした自然界の様々なものに限定されたのです(104)。

それ故、原始時代の人々にとって、擬人的な見地から神を父なる神あるいは母なる神として思い浮かべることさえ難しかったのです。さらに、罪や苦しみから人間を救済することの必要

性に関する理解はほとんどなく、この問題が最大の関心事であるヒンドゥー教、仏教、イスラム教、ユダヤ教、キリスト教のような、後の歴史的な宗教とは著しく対照的でした(105)。

後に、墮落した人類が擬人観の見地から神を思い描き始めることができる所まで神の摂理が前進したとき、古代文明において、様々な自然神の中で女性神の崇拝が流行しました(106)。これは、特に‘文明の誕生’(107)と言われている古代近東から現れた、考古学的な事物や文書の証拠の豊富さによって立証されます。

この移行の主な理由は、狩りと収集の社会から農業と集団の社会への移行が起きたためです(108)。そこでは、人々は存在のために、より強く自然に頼っていたので、人々は容易に、生命を創造し、維持する女性の生殖力を、比喩的に、同様な力を持っている女性の神々や母なる大地と結びつけたのです(109)。

古代近東から掘り出された、儀式で使用された多くの工芸品や物資、そしてそれらの象徴的な表現は、女性の‘多産性’、‘特に…生殖と食料調達’(110)のモデルとしての、‘一なる女神、偉大な母’に関する様々な側面を示しています。一方で、女神はしばしば、ゆがめられ、不釣り合いな形で、性器、‘胸…と外陰部’にあからさまに焦点を合わせて、誇張され、さらにグロテスクな姿に描かれていました(111)。確かに、そのような卑しく下品な姿の女神の描写は、男性の神が慈悲深く聖なるものとして崇められる、後の一神教の宗教であるユダヤ教、イスラム教、キリスト教と著しく対照的です(112)。

摂理的な見地から言えば、もしエバの二重の罪による女性の過度に低められた価値が完全に回復されていたなら、天の母は適切に表現されることができたでしょう。しかしながら、繰り返された人間の失敗——特にアダムとエバの墮落を解消することができたはずの、摂理的時点における世界的、宇宙的レベルの路程におけるノアと彼の妻の家庭の失敗——によって、神の摂理は、次のイエスと彼の花嫁の時代に世界的、宇宙的レベルの基台を作るまでの長い延長路程となりました。

その間、墮落した人類の内的、外的知識を高めるための天の父母の少なくとも 95 パーセントの貢献がなされたのであり、同時に墮落人間が蕩滅期間の苦難のかたちで蕩滅を払ったために、墮落人類の神に関する観点は、宗教を通じて、擬人的、人間的な表現で捉えるように前進しました(113)。にもかかわらず、エバの二重の罪が完全に回復されず、それに伴って、天の母が、彼女に当然払われるべき正当な敬意を取り戻すことができなかったために、墮落人間の女神に対するイメージは俗悪と言ってもいい程、低いレベルにありました。天の父母は、人間の5パーセントの責任がなされた範囲でしか働けないので、天の父母は屈辱的な歪曲を甘受するしかありませんでした。

畜産における雄の生殖機能がより良く理解された遊牧民の社会において、豊かさの唯一の源としての偉大な母への崇拝が衰退し始めました(114)。豊かさの象徴としての女神の低下した

地位の代わりに、彼女の配偶者としての男性の神——息子であれ恋人であれ、あるいは兄弟であれ夫であれ——が、彼女と生殖と創造の力を共有して、より大きな役割を引き受け始めました(115)。

しかしながら、被造世界に対する主権を共有する、ほぼ同等な女性神と男性神のこの発展は長く続きませんでした。男性の神の登場が始まった途端、すぐに、‘天の父’、‘全権を有した嵐の神’、あるいは‘神々と女性神たちのすべてを支配する男性の創造神’を中心とした‘男性の一神教’が出現しました(116)。さらに、一なる中心的な豊穡の女神から、性的な関係にある男性と女性の神々に焦点が移った途端、神々のイメージは、神々の間で、そして人間と、また動物との間でさえ、乱れた性的関係を持つようなものになるのは時間の問題に過ぎませんでした(117)。

ところで、男性の一神教の出現は、‘超越的な精神(心、自我)と、より劣った依存的、物質的な性質’という不均衡な二元論をもたらし、超越的な前者を男性の神とその延長にある男性たちに、より劣っている後者を女性の神々と女性たちに結びつけました(118)。男性たちは最高の男性の神と同一視されたために、男性たちが必然的に、女性たちに対して優位になりました。男性の一神教が発展するにつれて、女性たちは神の中に姿が見えなくなりました。

それ故、男性の一神教において、性が、神の女性の側の権威や権力を引き下げる手段となりました。それはまた、女性たちを下層の地位に陥れる、メアリー・デイリー(Mary Daly)が‘性的なカースト制度’と呼ぶものを作り出しました(119)。

男性の神を中心とした一神教の現象はまた、家父長制の文化の台頭と固く絡み合っており、「その宗教的なシステムを通じて家父長制の社会的階層を強化」(120)したのです。クリフォード・ギアツ(Clifford Geertz)によれば、文化は「男性たちが彼らの人生観についての知識を伝え、永続させ、発展させることによって、記号化された歴史的な意味の伝達パターン」(121)と定義され、宗教は単に文化的なシステムの一部だということです。

この脈絡において、文化的な源泉としての男性の一神教に関する様々な象徴を操ることによって、墮落した男性は、言語、教育制度、‘言説における男性の独占権’すなわち存在の意味における男性の独占権によって、父権制、男性支配と‘性的差別的な社会構造’を促進し、普及させました(122)。ギアツの文化の定義や、文化的なシステムとしての宗教という定義は、神の心情原理に関連して考慮すべき有効で参考になるものです。

すなわち、文化と宗教のようなものが、往々にして5パーセントの自由意志によって人間が形成したものであるとすれば、人は安易に、それらを100パーセント、神から与えられた現実として受け入れるべきでなく、それらが永遠の価値を持っているか、あるいは墮落歴史とともに捨てられるべきであるかどうかについて、絶対的基準から詳細に検討しなければなりません。

こうして復帰歴史を功德としての恵沢の観点から見ると、天の父母の内的知識を取り戻そうとする人類の努力としての宗教の進歩は、動物の崇拜から、豊かさの中心である女神、そして一神教の男性の神へと進みました。事実上、この進歩的な運動はおおまかに言うと、‘失敗（墮落）の路程をひっくり返す’復帰の路程となりました(123)。

墮落のすぐ後では、共同体レベルで人類が被造物の下になり、そして墮落の過程から人類が複数の血統を持つようになったために、宗教を通じて彼らを高めようとする人類の初期の試みは、せいぜい多神教と自然すなわち肉身だけの被造物を崇拜するという、正に低いレベルにありました。その後、多神教の自然神の中で、人間が擬人的見地から神を想像し始めると、女性の豊かさを表わす女神が最初に崇拜されるようになりました。

この展開に対する摂理的な理由は、アダムとエバの5パーセントの自由意志による選択が墮落の結果を招いたのですが、たとえ非原理的なものであったとしても、エバが最初の選択を行ったために、女性の低下した地位の反映としての非原理的なレベルであったものの、女神が最初に焦点となったということです。

それから、非原理的な多神教から、より原理的な一神教を導入する摂理的な時になったとき、男性より引き下げられた女性の地位が男女の間で回復されなかったために、男性と男性の神が一神教を表現するようになりました。確かに、これは天の父と天の母として、性が平衡し、それぞれが同等な権限を持っている、天の父母である一神教の完全な復帰の形ではありませんでした。いずれにしても、男性の一神教が今日までの、5パーセントの人間の自由意思がなした責任遂行の結果であったために、天の父母はそれを続ける以外にありませんでした。

ヘブライの男性一神教

ノアと彼の妻の家庭の世界的、天宙的レベルの基台の路程の失敗の後に、天の父母が、次の世界的、天宙的レベルの路程における摂理の準備のために、アブラハムとサラと共に男性の一神教を始めなければなりません。彼らはアベルの位置の氏族レベルの血統の出発点であり、やがて次の世界的、天宙的レベルの基台の路程のための中心人物であるイエスと彼の花嫁を迎えるようになっていました。

ところが、完全なる、性の均衡した唯一神が受け入れられる摂理的な時ではなかったために、アブラハムとサラの血統から発展した男性の一神教であるユダヤ教は、必然的に神の女性の側の認識に限界があり、ひいては男性と等しい価値を持っている女性の理解には限界がありました。

天の父母の見地からしても、天の父母が性の平等も含めて完全な復帰を期待できた摂理的な時ではなかったため、その時、天の父母が望むことが出来た最善と言え、アブラハムとサ

ラの子孫であるイスラエル民族が、たとえ主に男性であると解釈されていたとしても、ただ‘一なる真の神’、ヤハウェが存在することを認識することでした(124)。

同時に、イスラエル民族は世界的、天宙的レベルの中心人物たちが来るまで、彼らの血統の純粹さを維持すべきでした。しかしながら、イスラエル民族がただヤハウェだけを崇拜し、純潔を守るというヤハウェの願いは、カナン人の生殖力や、儀式的セックスや、儀式的売春を神の崇拜の一部として実践したバアル信仰の性的カルトのような、性的な乱交を特徴とした多神教の文化を持つ周辺民族にいつも脅かされていました(125)。

ヘブライ人の聖書(旧約聖書)は、イスラエル民族がカナン人たちの男性神バアルや女性神アシラのような異国の神々を崇拜することにたいして、ヤハウェが激しく責める文章で満ちています。悪名高い例が、バアル神のために寺院を建て、ヤハウェの‘預言者を殺した’にもかかわらず、女王イゼベルに‘バアル神の450人の預言者とアシラ神の400人の預言者’と食事をすることを許したイスラエルの王アハブに対するものでした(126)。イスラエルの神であるヤハウェが、イスラエル民族が一瞬たりとも唯一の真の神である天の父に対する信仰を失わないようにと、常に奮闘しなければならなかったほどに、バアル信仰は、確立され、文化的に浸透していました。

もう一つのカナン人の生殖崇拜に対するヤハウェの猛烈な非難のポイントが、儀式的な売春の問題にありました(127)。「肥沃な三日月地帯」の農業地域にとって非常に重要な‘肥沃さの謎’が、神と女神の間の性交の結果であると信じられていたことにより、生殖崇拜において、セックスが神聖な行為であるとみなされました(128)。神殿娼婦すなわち‘zonah’との儀式的な性的交渉は、信奉者たちがただ神々の性的な結合に参加するだけでなく、彼らが存続と存在に欠かすことのできない生殖の普及に加わることを象徴していました(129)。

イスラエル民族のヤハウェにとって、‘姦通してはならない’、自分の配偶者以外のセックスパートナーを‘欲しがってはならない’という厳しい性的な戒律を与えたかにかかわらず、カナン人の儀式的な売春は‘忌まわしいもの’以外の何ものでもありませんでした(130)。

儀式的な売春というカナン人のカルト的实践は、たいていの場合、男性の神より女神アシラに関連づけられており、イスラエルのヤハウェ信仰、すなわち‘倫理的な男性一神教’はそれに反対し、それを単に問題の女神アシラによる忌まわしい慣わしと見なすにとどまらず、女性全般にたいする評価を低下させました(131)。

カナン人の寺院は、しばしば女神アシラを表す木の象徴の印がつけられており、女神アシラはまた、蛇のシンボルによって描かれ、‘一匹または数匹の蛇を持つ’‘蛇のレディー’のようなあだ名で知られていました(132)。ペギー・リーブズ・サンデー(Peggy Reeves Sanday)は、アシラの木と蛇のシンボルを、同じく蛇と善悪を知る木を取り上げている、エデンの園のアダムとエバのヘブライ人の創造神話と結びつけています(イタリックは筆者)(133)。

その物語において、エバすなわち女性が、蛇から「あなたがそれ[‘善悪を知る木’の禁断の果実]を食べると、あなたの目は開かれ、善悪を知って、神のようになるでしょう」と誘惑されて、最初に蛇に屈した人であったために、その延長上にある女性がより弱いものであると見られたのです(134)。それだけでなく、女性は儀式的な売春を行う不道德な女神アシラと結びつけられて、より非倫理的な存在とみなされました。

ジュディス・オクショーン(Judith Ochshorn)は、ヘブライ人の創造の物語において、アダムとエバのヤハウエによる罰せられかたが平等でなかったのは、それはその物語の当時のイスラエル民族の家父長的な文化的前提が、エバすなわち女性は男性に比べて‘十分な善悪の感覚’に欠けているということだったためだと指摘しています(135)。

そして彼女は、創世記 3:16 を参照しながら、「女性に可能な役割は母親と妻だけであり、…[エバと、その延長上の女性たち]はそれらの役割において呪われていた」と書いています(136)。それと対照的に、ヤハウエのアダムに対する罰は「夫と父親としての役割に限定されておらず」、「仕事、土地、死」(創世記 3:17-19)に関連したより複雑な責任を含むと、彼女は続けて書いています(137)。

家族を養育し、支えるという家庭内の領域以外に、女性たちはより大きな社会的領域や、他の被造物に関与してはいけないことになっていました。このようなヘブライ人の、文化的な前提とされた男女の異なる役割の結果としての、アダムとエバにたいする異なる処罰についての、(間違った)解釈は、女性を周縁的で、取るに足りない、より劣ったものと偽装する、家父長制の文化のさらにもう一つの例です。

ヘブライのアダムとエバの物語の解釈に関して、今日の大部分の聖書学者たちは、創世記 1:27 と創世記 2:21-22 における、ヘブライの2つの矛盾するアダムとエバの創造の物語は、かつて別々の物語であり、後に創世記物語を構成するためにくっつけられたということに同意しています(138)。

神が女性を造るために男性のあばら骨を取るという創世記 2:21-22 の物語は‘民話の言語’で書かれており、紀元前 1,000-900 頃と推定されます(139)。神がご自身の‘かたち’に男と女を造られたという創世記 1:27 の物語は、紀元前 400 年ごろと推定され、‘バビロン捕囚以後の神学者’あるいは‘司祭の編集者’のグループによるものとされます(140)。たとえ創世記におけるアダムとエバのこれらの2つの矛盾する創造の物語が、あたかもそれらが1つであるかのように後でくっつけられたとしても、それらは男性と女性の平等な価値を見いだすことを望む人たちにとって創世記 1:27 の記述を選ぶのが有効な根拠になるのにたいして、女性が劣っていることを議論することを望む人たちは、容易に創世記 2:21-22 に引きつけられます。

後者の人々は、彼らが考えているように、創造の順序における女性の生まれつき低い地位を聖書が肯定していると指摘します(141)。人間の創造と男女の価値におけるこれらの矛盾す

る観点は、思想的な混乱のもう一つの例であって、人類が男性と女性の平等な価値に関する絶対的基準を回復するための摂理的な‘時代の恩恵’をまだ持っていなかったということですから(142)。

事実、男性と女性の平等な価値、そしてその延長上にある、天の父と天の母の平等な価値を回復するための‘時代の恩恵’はほとんどありませんでした。その当時のイスラエル民族が住んでいた文化的な現実はすべて男性支配でした。

一般的な女性にたいする低い見解は、イスラエル民族が、ヤハウエがもしかすると女性の側面を持っているかもしれず、そしてその女性(天の母)は相対する男性(天の父)と同等な力があり、有能であると想像するのに助けになりませんでした。アシラ、イナンナ/イシュタル、アナットのよう隣接するカナン文化の女神たちが、しばしば儀式的な売春に関連づけられて、放埒で、性的にみだらに描かれており、彼女たちは聖なるものではなく、‘不品行な女性’という卑しい姿に見なされたのでなおさら、イスラエル民族がヤハウエの女性の側面を、肯定的な観点から正当に評価する機会が、全く限られていました(143)。

実際、みだらでふしだらな行動は、カナンの神々や女神たちにおいては普通のことであったために、イスラエルのヤハウエを他の神々や女神たちから切り離すために、ヘブライの預言者たちと書記たちは、極端にも、ヤハウエから性を完全になくしました。彼らは性を‘汚れた…領域’に追いやりました。従って、性別のない観点から描かれる‘神聖な存在’であるヤハウエに接近するためには、人々は性から離れる必要がありました(144)。かくして、たとえヤハウエが男性であると知らされていても、エンキやバアルのような好色なカナンの男性の神々がそうであったように、ヤハウエは決してペニスを持っているものとして、あるいは性行為を行うものとは描かれませんでした(145)。

しかしながら、最終的に、一方では男性の神であることが知られていたヤハウエの性のない表現は、‘神聖な結婚の象徴’(146)を確立するにさいして、ヤハウエ主義に問題が生じました。他の異邦の宗教においては、結婚の契約は神/女神と王を代表者とする民の間に結ばれていました(147)。しかし、ヤハウエ主義においては、男性の神と男性の王の結婚は同性の結合を象徴することになります(148)。従って、ヘブライの預言者たちは、その代わりに言語上で、イスラエルの民を女性化する以外にありませんでした。少なくとも異性間の結合を象徴するために、イスラエルは、男性の神ヤハウエに対して花嫁になりました(149)。

にもかかわらず、ヘブライの預言者たちが男性の神であるヤハウエの花嫁としてイスラエルを女性化したことは、女性の低い観点を緩和するのに何の役にも立ちませんでした。かえって、それをただ拡大しただけでした。ヘブライの聖書は、花嫁であるイスラエルに対して「すべて道のかたわらを通る者に身をまかせて」、異教の神々や民と「姦淫を行った」と言って非難する、‘聖なる’‘夫’ヤハウエの嘆きに満ちています(150)。

ヤハウェはイスラエルに対する激怒を、女性の姿で表現されている‘邪悪’で‘よこしまな’異邦の民に関連づけながら、次のように続けています。「あなたはもろもろの憎むべき事に加えて、このみだらな事をおこなったではないか。…母のように、娘のように」。「あなたは母の娘であり…あなたの姉はサマリアであり…あなたの妹ソドムとその娘たちは……」(151)。ヤハウェ主義において、男性ではなく女性が‘邪悪’で‘よこしまな’存在であることは、苛ただしいほどに、何度も繰り返されています。

ともあれ、男性一神教のヤハウェ主義、すなわちユダヤ教は人間の責任分担を担う最先端にありました。それは天の父母が摂理を続けるために働きかけなければならなかった基台でした。墮落により、天の母と女性たちの両方において、女性の立場が低下し、そして、それ以降、世界的、宇宙的レベルの基台のイエスと彼の花嫁のための摂理的な時が到来するまでのイスラエル歴史の間に、低下した女性の地位を改善するための、女性の中心人物たちが無力であったので、天の父母には、イスラエルの家父長制の文化の下で摂理を続ける以外に選択肢はありませんでした。彼らが家父長制の文化に基づいて現実を解釈し、人間と神の両方における女性を低く見たのは、彼らの5パーセントの責任分担によるものでした。

後に天の父母は、ユダヤ教にたいして、天の父と母の95パーセントの責任から、神の女性的な側面を導入するために、後光(Shekinah)、すなわちユダヤのカバラ主義における‘神の女性的な要素’を導入しました(152)。それでも女性の側の基台はわずかであって、天の父母は、人間の責任分担を通じて、天の父母の二性を詳細に説明する具体的な概念になるように、その観点を高めることはできませんでした。

男性の一神教の継続としてのキリスト教

イエスと彼の花嫁の世界的、宇宙的レベルの基台を確立するための路程が復帰を完了できなかったとき、彼らはまた、性の均衡がとれた一神教としての‘性と二重の位置の均衡がとれた神の心情主義’を確立するための世界的、宇宙的レベルの思想的勝利を勝ち取ることはできませんでした(153)。さらに、彼らがすべての人類に影響を与えたカインとアベルの不平等な地位を解消させることができなかつたので、イスラエル民族——その家系はイエスと彼の花嫁で頂点に達していた——の先祖、アブラハムとサラから始まった男性の一神教も分裂し始めました。

まず第一に、たとえ男性の一神教が多神教より神の心情原理に少しだけより近くて、それ故にアベルの位置をとったとしても、それが‘性と二重の位置の均衡がとれた神の心情原理’の絶対的基準ではなかつたために、絶対的基準の完全な理解にまで復帰されなければなりません。それは世界的、宇宙的レベルの基台を完遂する路程の時代になされるのです。しかしながら、世界的、宇宙的レベルの摂理的な時が、イスラエル民族のイエス不信によって再

び逸せられ、イエスは彼の花嫁とともに使命を完成するために肉体的に活動することができなくなりました。

それから、墮落以後の人間にたいする不平等なカイン・アベルの分立方式によって、イスラエル——イエスとその花嫁に至るアベルの位置の血統であった——は、カインの位置になり、イエスの霊的な血統として育てられたキリスト教徒は、アベルの位置になりました(154)。この状況は、また、イスラエル民族から始まった一神教が、再臨の時が来るまでの2000年の間に、同様にカインとアベルの位置、すなわちユダヤ教とキリスト教に分立されることを意味していました。それから、キリストの再臨と彼の花嫁の世界的、宇宙的レベルの路程とともに、天の父母は再び、全てのイデオロギーの対立の問題をも含めて、完全な修復を望むことができるようになったのです。

アブラハムとサラから始まった最初の男性の一神教が、それぞれユダヤ教とキリスト教というカインとアベルの位置に分かれただけでなく、なお続いているカイン・アベルの不平等な公式が、人間の分裂のあらゆるレベルに影響を及ぼしたために、後に、アブラハム、サラ、ハガルの血統も、もう一つのカインとアベルの位置に分けられ、いずれも男性の一神教を支持するイスラム教とユダヤ教になりました。

天の父母は人間の献祭のレベルに応じて、摂理的なみわざをなさざるをえませんでした。上述した摂理的な背景は、20世紀になされる再臨主と花嫁の路程の前の2000年の蕩滅期間において、天の父母がキリスト教を中心として摂理を続けるための基台となるためのものでした(155)。キリスト教はイエスの最後の決断によって発展しましたが、彼の花嫁による女性の側への貢献はなされないまま、それはただ男性の側のみに貢献しました。

にもかかわらず、再臨主と彼の花嫁の路程の準備において、特にキリスト教の初期の形成段階の間に、人々が神の女性らしさを認識するように導いた天の父母の95パーセントの努力がありました。神の女性性格について靈感を与えるこの努力は、グノーシス主義の経典と外典の福音書の中で明らかにされています(156)。それでも、さらにそれを追求すべきかどうかは、その当時のキリスト教徒の5パーセントの人間としての責任分担にかかっていました。

ある特定のグノーシス主義のキリスト教徒たちはすでに、神は男性の神だけではなく、「男らしさと女らしさの両方の要素から成り立つ二性の存在」であると主張していました(157)。彼らはまた、父と母の両方の神に祈っていました。「父なるなんじから、母なるなんじを通じて、二つの不滅の名、父母なる聖なる存在」、と(158)。ピリポの福音は、「我々がヘブライ人であったとき、我々はただ母親だけをもつ孤児でしたが、我々がキリスト教徒になったとき、我々は父と母を持ちました」と言って、天の父母である性の均衡した存在を認めました(159)。

トマスの福音において、イエスは彼の母親と天の母を比較しながら、「私の母は‘私に…偽りを与えました’が、私の本当の‘母’は私に命を与えました」と語ったと伝えられています(160)。

ヨハネの『秘密の書』において、ヨハネは、光に包まれた「3つの姿をした…人物」が、「私は‘父’であり、私は‘母’であり、私は‘子’である」と宣言する不可思議な光景を見ます(161)。その神秘的な姿はキリスト教の中心的な象徴である‘三位一体’や三つの‘聖なる人格’を表すものと理解され、聖霊は‘母’に相当するものとされています(162)。

これは、霊(pneuma)という単語は中性であり、他の二人の‘人格’が父と息子であるから、三位一体は女性の表象のない、もっぱら男性的なものであるという、ギリシャ正教の三位一体の解釈とは、対照的なものです(163)。いずれにしても、神を父と母の両方として認識した初期のキリスト教徒たちはまもなく、「自らを‘正統な’(文字通り、伝統的な)キリスト教徒と呼んだ人たち」によって沈黙させられました(164)。彼らの中には、そのような異端的な教えを拒絶して、それらをキリスト教の法典から遠ざけるために精力的に働いたいわゆる教父たちがいました(165)。

最近のキリスト教のフェミニズム神学は、すべてのキリスト教徒が今日神聖な経典として受け入れている、新約聖書の27巻に書かれたキリスト教の経典が、キリスト教の当初から、そのままあったものではないという認識を高めるのに多くの貢献をしました(166)。それは、多種多様な意見があつて、何が異端で、何が正統な教義であるか、激しい論争をしたときの、キリスト教歴史の最初の数世紀の産物でした(167)。

それでもなお、双方の間のどこにラインを引くべきか、決して明確ではありませんでした。主要な論争的討論の主題の中に、神の女性性格と教会における女性の指導力の問題がありました(168)。しかしながら、‘男性中心の選択’と‘改ざんプロセス’を伴う、緩やかではあるものの、着実になされた‘初期教会の家父長化’を通じて、教父たちは母なる神と、教会における女性の貢献に関する資料を組織的に排除しました(169)。

教会の神学者たちは、多神教の解釈を招くことを恐れて、教会の教義において母なる神の概念に反対し、神は単数の男性であり、父であると主張しました(170)。けれども、小さなユダヤの宗派から成長したキリスト教会が、多くの男女性の神々に慣れ親しんでいるギリシア・ローマ世界の異邦人の改宗者たちを取りこむために、彼らは教会の教義に特定の女性らしい要素を導入する必要がありました(171)。

最初に、‘花婿’としての神と‘花嫁’としてのイスラエルという、ヘブライ人の考えに従って、キリスト教徒は、男性の神と花嫁としての人々あるいは教会という、ヘブライ人と同様な考えを採用しました。キリスト教の解釈においては、父なる神から始まり、復活した‘よみがえりの主’であり、神の子であるキリストで終わるといように、ヘブライの男性の神に付加された次元があります(172)。

キリスト教のそのような構成の下で起こる問題は、神の階層が特定の性の、男性の‘父’なる神と、男性の‘神の子’に始まり、そして終わるために、神の女性の側面や、女性たちのような、

そのカテゴリーに属さないすべてのものは、階層の中でより低いと見なされたのです。特に、たとえすべての人間が、神聖な父なる神とその子より低いとされても、神性なる存在——父と子——が両方とも男性であるという事実によって、エペソ人への手紙 5:20-27 が明らかに示しているように、男性が女性に対して優位になったのです(173)。

家父長制的な教会神学者がキリスト教の教義に取り入れた、もう一つの女性らしさの要素が‘聖マリヤ論’です。それはイエスの母親のマリヤに基づくもので、主として、‘救世主イエス・キリスト’が特別な人物であるという観点を支持する手段として発展しました(174)。聖マリヤ論の根底にある論理は、もしイエスが神のひとり子であって、マリヤを通じて‘生まれた’ならば、たとえマリヤがイエスに比べられないとしても、それでも彼女は普通の人々より際立つ卓越した特質を持っており、それがさらにイエスを特別な人物として高めるであろうということです(175)。

すなわち、新しいアダムとしてのキリストの役割と並んで、彼女は、教会の愛称である‘新しいエバ’と命名されました(176)。人類に罪と苦しみをもたらした墮落したエバと異なり、新しいエバであるマリヤとは、教会とともに、神のみ旨に従順な‘娘たち’であり、彼女たちを通じて再生するであろうキリスト教徒を増やす、キリストの象徴的な‘花嫁たち’でありました(177)。

マリヤをめぐる追加された概念は、永遠の処女性と、後の無原罪懐胎の概念でした。それらは人間の性に対する初期キリスト教会の見解であった禁欲主義への傾向と、イエスの奇跡的な出生から、性交を連想させるあらゆるものを切り離そうとする要請に不可分に関係していました(178)。ギリシャとラテン系のキリスト教は、特に、より高い理想に達することができると思える霊的な愛に比べて、身体的な肉体の愛をより低いものとみなすプラトン哲学の精神性に強く影響されていたので、そのようなマリヤの理想化された姿を追求する強い願望を持っていました(179)。

その議論の論理は、もしイエスが聖なる存在であるなら、彼の母親は、人間の性的な低い愛によって損なわれるはずはないということでしたが、影響力を持った教父、アウグスティヌスによれば、子供の繁殖には、そのような性的な愛は必要なものとみなされていました(180)。結局、いかにキリスト教がマリヤを高めたとしても、彼女の基本的な目的はイエスに侍ることでした。イエスが神の息子であったように、彼女は決して神の娘であると、同等な言葉で解釈されませんでした(181)。

しかしながら、神の摂理的な見地からみると、禁欲主義に対するキリスト教の傾向は避けられませんでした。イエスが肉身と霊人体の両方で彼の花嫁と一つになって、理想的な夫婦の一体をなすことができず、肉身のない霊的な基台だけを築くことができたために、夫婦における肉身と霊人体の‘絶対的性[的結合]’に関する天の父母の創造目的を理解するためのキリスト教における基盤は極めて少ししかありませんでした(182)。

さらに、イエスは、女性の地位を高めて、天の母と女性たちに貢献しえたであろう花嫁を持つことができず、霊的なレベルでさえ、ただ個人的な男性の側の人間の責任分担をなしただけであったために、キリスト教はひたすらアブラハムとサラの血統のイスラエル民族から始まった男性の一神教を続けました。続くキリスト教の2千年の歴史の間に、キリスト教神学者たちは、イエスの個体的、男性的、霊的な功績を高め、絶えず並外れたレベルに高めました。性の均衡した教理に至る考えはありませんでした。

それは人間の5パーセントの自由意思の部分であったために、天の父母はこれを改めることはできませんでした。このようなキリスト教の解釈は、‘性と二重の位置の均衡がとれた神の心情原理’の天の父母の理想に少しも近づくことはできませんでした。それは、真の父母、すなわち世界的、宇宙的レベルの基台路程のための男性と女性の中心人物が、絶対的基準を明らかにし、そして世界的、宇宙的レベルの勝利を勝ち取らなければならない20世紀まで待たなければならないのでした。

統一運動は男性の一神教を超えて、性と二重の位置の均衡がとれた神の心情原理に向かい、宇宙の四位基台を回復させなくてはならない

イエスの霊的な後継者であるキリスト教徒によってなされた2000年の蕩滅の後に、世界的、宇宙的レベルの基台を確立することができる、摂理的な時がやって来しました。天の父母は、世界的、宇宙的レベルの復帰を完了することを願って、20世紀に統一運動を起こされたのです。

この運動に加わるよう召命された人々は世界中からやって来しました。彼らはただ個人として自発的に来たのではなく、彼らの先祖との共同体レベルの上に立っていたからであり、先祖たちの功労は、よりよく原理的な生活に生きようとした彼らの努力から築かれていました。天の父母と霊的な事実を信じなかった人々が、世界的なカインの位置に立ったのにたいして、彼らはアベルの位置に立ちました。

そして、世界的、宇宙的レベルの基台路程を達成するよう召命されたのは、男性と女性の中心人物だけではなく、統一運動に導かれたすべての世界中の人々でありました。彼らはカインの位置にいる残りの人類に手を差し伸べ、天の父母の絶対的基準について証言し、そして人類の完全な復帰の道を開くアベルの位置の共同体レベルの責任を持っていました。

イエスと彼の花嫁の路程が不完全になること、すなわち、後に延長路程が必要となることは、決して天の父母の本来の願いではありませんでした。この結果はひとえに、イエスと彼の花嫁の路程の時に、人間の責任によって起きた結果でした。それ故、統一運動は、イエスの地上の人生が終わり、個体的、男性的、霊的な側面における人間の基台だけを成就した時点から始めることが願われました。

天の母と全女性を代表して基台を築くことができたはずのイエスの花嫁が立てられなかったために、墮落とエバの二重の罪から広がってきた家父長制の文化は、人間世界のいたる所でそのまま続きました。キリスト教文化は男性中心であり、再臨主とその花嫁が育った韓国で強い支配力を持っていた儒教文化も同様でした(183)。

それ故、天の父母とイエスが、20世紀に延長路程を始める中心人物である再臨主とその花嫁に使命を相続する時、初めに男性の中心人物を導くことから始める以外にありませんでした。その後、男性の中心人物が再臨主と花嫁の路程を完遂することに同意するや、世界的、宇宙的レベルの路程の完全な復帰のために何がなされなければならないか、探究することが彼の最初の責任になりました。それから彼は、彼の花嫁にたいして真の配偶者となり、彼女が、女性を代表して、そして天の母の顕現のために、エバの二重の罪を蕩滅する彼女の個体的責任分担を完遂するように協助しなければなりませんでした。

再臨主とその花嫁である男性と女性の中心人物の世界的、宇宙的レベルの路程は、アダムとエバにさかのぼる、すべての人類の非原理的な行為を蕩滅復帰する責任がありました。彼らは単に様々な共同体レベルの責任を完遂しなければならなかっただけでなく、アダムとエバの異なる個別の罪に由来する、異なる個体としての責任をも適切に蕩滅復帰しなければなりませんでした。

彼らは、適切な時に、男性と女性のそれぞれの側における第一祝福を達成しなければなりませんでした。第一祝福の成就がなければ、残りの第二祝福と第三祝福をなすことはできません。また、三大祝福のすべての5つの役割を成就することに対するアダムとエバの失敗——それはまさに原罪です——を完全に復帰することができません。

さらに、エバが二重の罪を犯すことによって、女性を——男性ではなく——墮落歴史を通じて過度の苦痛と蔑みの苦しみの中に巻き込み、男性に対してカインの立場に立たされたために、復帰されたエバの位置にある女性の中心人物は、女性たちと彼女の娘たちを導いて、男性に対する女性の平等な価値を取り戻し、天の母が天の父と同等に顕現する道を開くために戦わなければなりません。

特に、エバが共同体レベルでアダムと墮落する前に、個体レベルで、ルーシエル天使長の非原理的な言葉に引き込まれて墮落したとき、それは女性たちと天の母の本来の位置の喪失をもたらすドミノ効果を引き起こしました。この行為は宇宙的四位基台をくつがえしました。それ故、宇宙的四位基台を完全に復帰させるために、復帰されたエバの位置にある中心人物が、女性と天の母の本来の位置を取り戻す必要があります、そのために彼女は‘絶対的性と二重の位置の均衡がとれた神の心情原理’のために戦う必要がありました。

彼女は、復帰されたアダムの位置にある男性がなさなければならないことに、さらにつけ加えて、それをなさなくてはなりません。そうすることによってのみ、永遠なる均衡と調和が被造

物全体に復帰されることができます。要するにエバが、墮落のすべての結果をもたらした彼女の二重の罪へと導いた非原理的な考えを持ち始めた最初の存在であり、天の父母の性の均衡した二重の位置の天宙的四位基台に破壊と不均衡をもたらしたのだから、復帰されたエバの位置の女性と、彼女の娘たち——彼女の共同体としての延長——が、復帰のために戦い、完結、完了することが必要となります。

統一運動はキリスト教から、男性を中心とした家父長制の文化と、復帰されないまま二重に疎外されたエバの立場を継承したので、その運動が初めに男性の中心人物を中心として始まることは避けられませんでした。また、始めに天の父としての神の一面的な理解を持つことも避けられませんでした。この過渡的な構造は男性を中心とした家父長制の文化の下で数十年間も続いてきました。

その上、蕩滅復帰の観点から見ると、男性の側におけるアダムの罪の位置は、エバの二重に疎外された位置よりもわずかに原理に近かったために、天の父母は摂理を男性の側の復帰から始めることを認めるほかありませんでした。

今や、男性の中心人物である‘真の父’が、‘すべてを成し終えた’という遺言と共に霊界に行かれました(184)。それは彼が、人類全体に貢献する共同体レベルの部分とともに、男性の中心人物が男性の側を代表する個体レベルにおいて成しうることを完了したことを意味すると理解されるべきです。しかしながら、女性たちと天の母に影響を与えている個体レベルにおける女性の責任と、人類のために貢献する残された共同体としての責任が、いまだに女性の中心人物と彼女の娘たちに委ねられているのです。

2012年に男性の中心人物が昇天されてから、女性の中心人物である‘真の母’は統一運動の責任を持ってきました。しかしながら、彼女の前に現われた文化が主に家父長制であったために、神の心情原理から要請されるような、男女の平等を実行するための実践は限られていました。結果として、彼女は、彼女のカインとアベルの両方の位置の息子たちと、幾人かの娘たちから来る、多くの抵抗に直面しています(185)。彼らは過去の文化的に作られた男性の覇権と、一方的な男性の一神教を超えて神の摂理が働くときが来たことを受け入れようとしません。

彼らの混乱した思考は、なぜ神は単に父なる神ではなく、そして女性たち——真の母と、母なる神はもとより——は、なぜ男性の相対者に従属的になるべきではないか、ということを理解していません。彼らは統一運動の文化が、大部分、墮落した過去からの様々な文化的な影響の産物であるキリスト教と韓国の儒教の背景から来た人々によって形成されてきたことを理解していません。

それでもこれらの影響が蔓延しています。例えば、教父の1人である聖アウグスティヌスは、アダムのすなわち男性が、霊的、無形の男性の神の姿に似た‘単一の’人間の先祖であったの

に対して、エバは‘肉体的、有形の子供をつくる仕事’における彼の助け手となるために、アダムの一部から抜き取られたと論じました(186)。

それ故、自然の適切な秩序のために‘肉が霊に服従しなければならない’ように、女性は男性によって支配されなくてはならない従属的な存在とされました(187)。後に、もう一人の著名なキリスト教神学者であるトマス・アクィナスは、古代ギリシャのアリストテレスの生物学——霊的な面を含め‘精子は新しい生命のためのあらゆる潜在的な力を有しており’、男性とその息子たちを‘被造物の頂点’にするのに対して、女性とその娘たちは、聖なる種を欠いていて、‘不完全で’‘不具な’‘劣った’生きものである。——を採用しました(188)。

アクィナスは、アリストテレスの生物学に準じて、女性は‘できそこない’か、‘欠陥のある’人間であり、本来、完全であれば、もう一人の完全な男性を生むはずの、男性の精子に生じた障害の結果であると主張しました(189)。疑いなく、生物学のこの種のゆがめられた解釈は、若い男性である息子たちだけが‘生殖のために貢献し’、人間を代表するより優れた形態である男性を続けるための、貴重な‘精液’すなわち‘精子’の‘効果的、活性な’保有者であるとして、それは父系相続を主張するための基本的な根拠の一つとなっていました(190)。

韓国の儒教について言えば、人間社会にたいする階層化されたヒエラルキーの観点と、硬直化した儀式と礼節でもって、厳しく女性の場所を‘家庭の範囲内’に制限する一方、男性たちは‘政治的、経済的地位’に関するすべてのことを含めて、その他の社会領域への全面的な接近の機会を与えられました(191)。

さらに、この社会的な構造が世代を通して継続することを保証し、男性だけが家系の継承を続けるということを堅持するために、韓国の儒教は、‘男系の親族関係’の慣習と‘父系血統システム’をつくりあげました(192)。このような固く張り巡らされた男性同士の社会的な網の中で、女性たちは世代を繋ぐ仕組みに奉仕する‘単なるつなぎ目’以外の何ものでもありませんでした(193)。

女性たちは自立した、個人のアイデンティティーと権利を持たず、彼女たちは‘誰かの娘’、‘誰かの妻’、あるいは‘誰かの母親’として、彼女たちの人生において、男性との繋がりにおいてのみ、社会的に認められました(194)。限られた家庭の領域の中で、女性が権力と権限を持ちえる唯一の可能な例外は、彼女が血統の継承を続ける男性の跡取りを生むかどうかでした(195)。これはある家庭の嫁になった女性、すなわち義理の娘が、息子を産むことによって、その家庭内での重要な位置につくことができたことを意味したのに対して、他の家庭の嫁になった直系の娘は、彼女の生まれた家庭において何の力も持ちませんでした。

男性の中心人物と同じ地位を持つのは不適當であるとして、女性の中心人物に反対する人たちは、さらに天の母と女性たちのそれぞれの相対者にたいする平等な価値に反対していません。彼らは彼らの反対が及ぼす宇宙的な分裂効果を見逃しています。

すべての人間は、二重の霊的、肉的世界を含め、すべての二重の位置の総合実体であるため、男性と女性の等しい総合価値がそれぞれ天の父と天の母に似て確立されないかぎり、二重の霊的、肉的世界の間の均衡、調和、平和、繁栄への宇宙的四位基台を回復させることはできません。

‘真の母’の位置に反対する人たちは、エバが天使長の非原理的な言葉を受け入れることによって、神の絶対的心情原理を最初に喪失し、そして彼女を通して生まれてくる女性たちを頽落した、悲惨な、低い位置に引きずりこんだ人物であるために、復帰されたエバの位置にある女性の中心人物が、彼女の娘たちとともに、‘性と二重の位置の調和した神の心情原理’を取り戻し、それによって彼女の息子たちも含めて残された人類を教育するために働かなくてはならない、ということを理解しません。

彼らは女性の側の復帰がどのようになさなければならないかを明らかにするのは男性の中心人物の責任ではなく、それはエバの二重の罪の歴史的蕩滅を通じて苦しんできた女性の中心人物と彼女の娘たちによってのみ、明らかにされうることを悟る必要があります。結局、男性の中心人物が女性の側の復帰を明示し、実現しなくてはならないと主張することは、男性の中心人物が女性であると断言することに等しく、そしてそれは明らかに受け入れ難く、筋の通らないことです。

女性の中心人物は、よく知られたキリスト教の慣用句で男性の中心人物を‘神のひとり子’と呼ぶのにたいして、彼女自身を‘神のひとり娘’と呼ぶことによって、男性の中心人物に対する彼女の平等な価値を強調するための一貫した努力をしてきました(196)。おそらく、彼女がそのような努力をしているのは、統一運動の文化がこれまでのところ、‘救世主の’位置に関する理解において、あまりにもキリスト教的であったために、彼女が男性の中心人物に対して、彼女の平等な価値を強調する必要性を感じたからです。

人々に、男性と女性の中心人物の平等な価値を明らかに認めるための十分な教育がなされれば、彼女の息子たちに対する彼女の娘たちの平等な価値と、すべての男性に対するすべての女性の平等な価値を取り返すために、彼女が確かな努力をすることが期待されます。このような方法によってのみ、天の父母の本来の1なる数的価値に似て、平等な人間の価値の四位基台は確立されることが出来ます。

天の父母の永遠の創造目的は、神と男性と女性、あるいは神と復帰されたアダムと復帰されたエバの三位一体の位置を創造することに関するものではなく、三大祝福のすべての5つの役割を果たしている完全な男性と女性の四位基台を確立することです(197)。それらの役割の一つが人間の子供を作ることであり、たとえそれが女の子であれ男の子であれ、その子を最高の被造物として完成するように育てることです。

それ故、真の父母の責任は、彼ら自身の平等な人間の価値を取り戻すだけでなく、女の子であろうが、男の子であろうが、最初の子から始めて、子女としてのすべての人間の平等な価値を回復することを含みます。平等な人間の価値に基づいた正しい四位基台が、天の父母を中心として回復されるときにのみ、墮落した人類を悩ませていた性差別とカインとアベルの不平等な位置は、共に回復するでしょう。そうするときのみ、人間を正しい中心として、永遠の創造目的である天の父母の理想が築かれ始めるでしょう(198)。

結論

我々は、天の父母が誰かをどのようにして知ることができるでしょうか？ 我々は、我々が人間として誰であるかを知る時にのみ、天の父と天の母である天の父母を知ることができます。我々は、天の父母の完全なイメージ——性別は異なるものの平等な人間の価値をもつ男性と女性——であります(199)。

墮落、すなわちアダムとエバによって犯された原罪は、我々が誰であるかに関する知識を奪い、同様に、我々が被造世界の中心であり、宇宙総合実体相であることが何を意味するかについての知識を奪いました。墮落の経路が非原理的な思想から始まったために、復帰のプロセスは必ず天の父母の本来の思想で始めなければなりません。これは‘絶対的性と二重の位置の均衡がとれた神の心情原理’以外のなにものでもなく、そしてそれは男女の平等な価値と、四位基台の形成による繁殖の目的のための性差を明確に示すものです。

人間が男性と女性であることは、天の父母が天の父と天の母であることを知る十分な手がかりであるべきでした。けれども墮落とエバの二重の罪の後、墮落した文化——そのほとんど常に女性たちへ低い評価をしてきた——が、優勢で、説得力を持っている、そのような影響下にある墮落人類において、誰も、天の母が天の父と同じぐらい有能で、同等で、力強いパートナーであり、本来、女性と男性の関係もそうであると考えすることはできませんでした。

それ故、20世紀から摂理的中心の基台として立てられた統一運動は、‘天の父母の絶対的性と二重位置の均衡がとれた心情原理’を擁護するために重要な責任を持っています。それなくして、我々は摂理的な復帰を完了し、そして天の父と天の母である我々の天の父母に関して、他の人々に証することはできません。

我々は天の父母の絶対的理念に明確な理解を持ち、それを絶対の、永遠の中心として立て、そしてそれを墮落歴史の過程で蔓延したすべての非原理的な、偏った思想から切り離さなくてはなりません。ただそうすることによって、我々は他の人々を正しく教育することができます。

文鮮明師と韓鶴子の最初の子供として、天の母と女性に関する平等の問題は、私にとって本当に重大で、かつ個人的なものでもあります。この運動における私の生涯を通じて、神は男性の神であるとして一方的に教えられ、私は、しばしば落胆し、そして不満でした。女性として、私がこのような神に共感することは難しかったのです。

その状況は、初期の韓国の統一運動が、男性を中心としたキリスト教文化のみならず、古い韓国の文化——人間関係、特に男女の関係は生まれながら不平等であるという儒教の教えによる盲目的な、男性中心の愛国主義——でもあったということから、ある程度、理解できます。しかし、それはキリスト教と儒教が人類に多大な貢献をなしたということにかかわらず、言えることです。

天の父母がいかなる存在であるかを明確に理解すること——同等な天の父であり母であること、およびその延長である真の父と真の母が摂理的に同等な位置にあること——は絶対的に重要なことです。私は、私の兄弟姉妹を含んだ、統一運動のあるメンバーたちの思想的な混乱に深く悲しんでいます。彼らは、ひどく道を誤り、我知らず過去の家父長的文化——神と人間における、ジェンダーの平等を認めず、真の母の指導性を全く無視している——に向かおうとしているのです。

そのような行動は、真の父の願いとも反するものです。2012年に行われた、真の父の最後の公的行事であったアベル女性 UN 創設大会において、真の父は「男と女は価値において全く平等である」、「21世紀には、女性が[リーダーシップの]中枢になるであろう」と語りました(200)。真の母は「世界の女性の代表として勝利した」のであり、「真の女性のリーダー」になるであろう(201)、と真の父が宣言されたことから、真の父は彼の聖和の後、真の母のリーダーシップが訪れることを予期されていた、と推測することができます。

確かに、「女性時代の到来」という、この摂理的な接点は、人類の思想的な混乱を引き起こした、一方的で狭量な家父長的文化に摂理を後戻りさせるのでなく、真の母とその娘たちが一つになって、摂理的な使命を完遂するまさにその時なのです。

等しく能力を持っている、天の父と天の母である天の父母に関する適切な理解を回復するためのこのプロジェクトは、私にとって、画期的な出来事であり、努力によるものです。それはただ学術的な興味によるものではありません。なぜならば、それは天の母の似姿である女の私が誰であるかを知る、私の実存的な探求を進めるものだからです。

私は、この運動の人々が、この課題に感銘を受けて、男女の等しい人間的価値とともに、天の父と天の母である等しくバランスのとれた天の父母を解明する統一神学の道を開くことを願っています。そうすることによってのみ、私たちは世界に真理を伝える我々の運動の正しい一歩を踏み出すことができると、信じます。

【注】

1 “真のお母様は、韓国での指導者会議において、新しい指示を発表された,” 世界平和統一家庭連合 (FFWPU) ニュース (January.8.2013).

http://www.familyfed.org/members/index.php?option=com_content&view=article&id=4021:true-mother-calls-church-to-pray-in-name-of-heavenly-parents&catid=87:true-parents&Itemid=298

2 著者は、天の父母は性のバランスのとれた、価値的に同じ天の父と天の母の、一なる統一的存在であると見るが、簡潔のために、天の父であり天の母である一なる神を表すのに、天の父母という言葉を用いる。特に、天の父母の男性的または女性的な側面を表現するときには、天の父または天の母とする。天の父と天の母を表す代名詞と一緒に用いるときは、S/He と His/Her という用語にする。

3 Exposition of the Divine Principle (EDP『原理講論』) (HSA-UWC, 2005), 前書きと序言を参照。そのほかに、統一原理の初期の版である『原理原本』において、文鮮明師は、神は天の父と天の母であると述べている。文鮮明『原理原本』(1952)を参照のこと。英語訳が Hee Han Standard と Andrew Wilson によってなされたが、未出版。

4 Elaine H. Pagels, The Gnostic Gospels (『グノーシス経典』) (New York: Vintage Books, 1989),48.

5 Cheon Seong Gyeong (CSG『天聖經』) (世界平和統一家庭連合, 2013),602; EDP (『原理講論』),2,7,68,378,404; World Scripture and the Teachings of Sun Myung Moon, [WSTSUN『世界経典と文鮮明師のみ言葉』] (New York: Universal Peace Federation, 2011),55. 文蒼進, “God as the Heavenly Parent of Heavenly Father and Heavenly Mother” (天の父であり天の母である天の父母としての神) [GHPHFHM], Applied Unificationism, entry posted Jan. 2014, <http://appliedunificationism.com/2014/01/20/god-as-the-heavenly-parent-of-heavenly-father-and-heavenly-mother> も参照のこと。その論文の内容は本論文にも収められている。

6 EDP (『原理講論』),176.

7 「神の心情原理」という用語は、天の父母の核心は心情 (“Heart,” Shimjung) であるということによる; New Essentials of Unification Thought: Head-Wing Thought (NEUT『統一思想要綱: 頭翼思想』) (Tokyo: Unification Thought Institute, 2006),23.を参照のこと。NEUT において、李相軒は神の心情を次のように表現している。心情は「愛を通じて喜ぼうとする情的な衝動」(p.23)である。別のところでは、神の心情は愛と表現されるのみならず、創造目的を持つと述べている (p. 41)。著者は、神の心情が愛と目的という二つの契機からなるというこの主張に同意する。

8 EDP (『原理講論』),15,34.

9 CSG (『天聖經』),373; 被造物という言葉は、天の父母の創造の努力によって造られたすべてのものを意味するが、それは霊界と地上界の両方を含む。

10 CSG (『天聖經』),373; MOP (『平和のメッセージ』世界平和統一家庭連合, 2007),10; Philip Hefner, “Biocultural Evolution and the Created Co-Creator(「生物文化的進化と創造された共同創造者」),” in Ted Peters ed. Science and Theology: The New Consonance (『科学と宗教: 新たな調和』) (Boulder: Westview Press, 1998).

11 EDP (『原理講論』), 33; 5つの役割については、本文の以下を参照のこと。

12 EDP (『原理講論』),25,47. 天宙的四位基台は、神を‘正’、霊界と地上界の二界を‘分’、二界の統一である霊人体と肉身からなる完成した人間を‘合’とする基台である。: EDP,47-48を参照。

13 同上,2-3.

14 同上.

15 同上,181-187.

16 同上,18.

17 EDP (『原理講論』) では、ルーシエルがサタンであり、墮落人間は“サタンの血族”と見ている (p.68)。同時に、天の父母の永遠なる創造目的は絶対的で不変であるから、天の父母は決して我々人間の究極的な父母であることをやめることはできない。

18 E.O.James, The Ancient Gods (『太古の神々』) (New York: Capricorn, 1964),46.

19 F.E.Peters, The Children of Abraham (『アブラハムの子孫』) (Princeton: Princeton University Press, 2004),1.

20 金榮雲, Unification Theology (『統一神学』) (New York: HSA-UWC, 1987),16. 1936年、イースターの朝、イエスが統一運動の創始者である文鮮明青年に現われて、イエスの完成できなかったみ旨を、キリスト教を通じて引き受けてほしいと告げた、と金榮雲は書いている。

- 21 CSG(『天聖經』),139.
- 22 Paul Tillich, Systematic Theology(『組織神学』), Vol.1(Chicago: The University of Chicago Press, 1951),3.
- 23 EDP(『原理講論』),7.
- 24 同上,175.
- 25 CSG(『天聖經』2006)(世界平和統一家庭連合), 1115; CSG(『天聖經』2013),373; EDP(『原理講論』),75.
- 26 EDP(『原理講論』),15-16.
- 27 同上,17,41.
- 28 同上.
- 29 同上,18; NEUT(『統一思想要綱:頭翼思想』),3.
- 30 EDP(『原理講論』),19.
- 31 ここからは、次のような理由により、二性性相という用語の代わりに二重位置という用語を使用する。第一に、すべての被造物は正分合作用を通じて四位基台を形成する過程において、天の父母の二性性相(二重位置)に似るようになる(EDP, 24-25)。天の父母が‘正’の段階にあるので、二重位置は、天の父母の二性性相の相互作用を通じて、独立した、被造物を実体化し、それらが‘分’——四位基台を形成する一段階——の二つの位置のいずれかの位置を占めることを示している。したがって、創造過程において、天の父母の二性性相に似せて、独立した個体が形成されて四位基台の特定の位置を占めるならば、それらの個体は単に性質でなくて、実体的な存在である。そうであるならば、それらの四位基台の中での立場を実体的な位置とみるべきである。天の父母においても、それぞれが二性性相を持つ天の父と天の母という二重の人格であって、天の父と天の母がお互いに、そして被造物に対してそれぞれ関与する二重位置を持つことを明らかにしないで、ただ二性性相を有する存在であるというだけでは困惑させる。
- 32 CSG(『天聖經』2006),61,68.
- 33 EDP(『原理講論』),15.
- 34 注 32.を参照。
- 35 創世記 1:27.
- 36 EDP(『原理講論』),32-36.
- 37 同上,21,25; NEUT(『統一思想要綱:頭翼思想』),41.
- 38 霊のみの最高の被造物であり、責任分担を持っている天使についても言及しているが、EDPは主として人間の責任分担に焦点を当てている(p. 69)。ところで著者は、三種類の被造物——天使を最高とする霊のみの存在、動物を頂点とする肉体のみの存在、霊肉の総合としての人間——は、個別的、集団的な責任分担を持っていると推定している(EDP, 47-48, 68)。しかしながら、三種類の被造物はそれぞれ異なった目的を持っているので、5パーセントの責任分担の性格もそれぞれ異なっているが、この問題に関する詳細な議論は、本論文の範囲を超えているので省略する。
- 39 CSG(『天聖經』2006), 1113; 霊的世界と物質世界からなる、宇宙という天の父母が創造した被造物世界の二重性は、二重位置の論理につながっている。
- 40 この主張に関する学問的な説明については、Tyler Hendricksの“An Inquiry into God as Our Heavenly Parents(「我々の天の父母なる神についての考察」),” Applied Unificationism, May 20, 2013.を参照のこと。
<http://www.appliedunificationism.com/2013/05/20/an-inquiry-into-god-as-our-heavenly-parents>.
- 41 EDP(『原理講論』),21.
- 42 同上,25,37,376.
- 43 同上,41.
- 44 同上,24-25,41.
- 45 CSG(『天聖經』2013),249.
- 46 Norman Geisler, Systematic Theology(『組織神学』),Vol.2 (Minneapolis: Bethany House, 2003),92.
- 47 <http://www.merriam-webster.com/dictionary/perfection>; Geisler,345-346.
- 48 EDP(『原理講論』),32.
- 49 同上,33-34.
- 50 同上.
- 51 同上,34-35.
- 52 CSG(『天聖經』2013),359, NEUT(『統一思想要綱:頭翼思想』),243-249.

- 53 EDP(『原理講論』),32.
- 54 NEUT(『統一思想要綱:頭翼思想』),105,118.
- 55 EDP(『原理講論』),34.
- 56 同上,34-35.
- 57 同上,47-49; CSG(『天聖經』2013),213.
- 58 EDP(『原理講論』),297.
- 59 CSG(『天聖經』2013),308-309.
- 60 同上,294.
- 61 同上,521-523.
- 62 EDP(『原理講論』),297.
- 63 同上,49.
- 64 同上,78; CSG(『天聖經』2013),605.
- 65 CSG(『天聖經』2006),847,852,874-875; CSG(『天聖經』2013),694.
- 66 EDP(『原理講論』),57-59,62-64.
- 67 同上,30. 第5回科学の統一に関する国際会議における、創始者のあいさつ(Washington, D.C., November 25-28,1976.)において、文師は「すべての動物の進化は人間において頂点に達した」と認めている。
- 68 CSG(『天聖經』2013),622; 公害に関して文師は「様々な被造物が調和して暮らすように設計されていた、神から与えられた環境を人間は破壊した」と述べた。
- 69 EDP(『原理講論』),37.
- 70 同上,24-25.
- 71 NEUT(『統一思想要綱:頭翼思想』),105.
- 72 CSG(『天聖經』2013),164.
- 73 EDP(『原理講論』),58-60.
- 74 同上,57-58.
- 75 創世記 3:6-7.
- 76 アダムとエバの墮落の結果としてもたらされた、カインとアベルの不平等な位置に関する議論は本章の範囲を超えているので省略する。
- 77 Philip Hefner,176.
- 78 文師は「すべての動物の進化は人間において頂点に達した、したがって人間は第一原因の究極的な目的である。」と語っている。(「絶対価値の探究:諸科学の調和」第5回科学の統一に関する国際会議,1976)
<http://www.tparents.org/moon-talks/sunmyungmoon76/SunMyungMoon-761125.htm>;
 著者は、永遠なる創造目的は、それぞれの被造物と責任分担を持っている様々な被造物との共同創造の過程によってなされるという、神の心情原理に基づいた、有神論的進化論のアプローチを取っている。人間はすべての被造物の総合であるので、人間の5パーセントの責任分担はすべての被造物の100パーセントの完成に寄与するが、霊のみ、または肉体のみの被造物は、それぞれの領域における完成のための5パーセントの責任分担を持っている。したがって肉体のみの被造物に関しては、創造者の95パーセントの責任分担は、最初の生物を造り、創造者が設定した、進化のプロセスのもとで見守り続けることである。彼らの限られた5パーセントの責任分担は、彼らの個別的、集合的な責任分担にしたがって、子孫を繁殖するという自由意志である。彼らの5パーセントの自由意志の範囲の中で、彼らは創造者による、彼らに与えられたそれぞれの特徴ある、本来のモデルにしたがって‘善’を選ぶか、あるいは変異や突然変異によって、許容された範囲をはみ出したり、死滅することによって、‘悪’を選ぶことになる。創世記一章には、神は創造のプロセスの各段階が終わるとき、‘善し’と言われ、それぞれの被造物に適した善の基準を与えられた。人間の創造に関しては、創造の過程は一つの連続したプロセスであり、霊的、肉的両界に及ぶ人間は、全被造物の総合であるために、天の父母は現存していた適切な原人を選んで、霊人体を注入して、最初の人間アダムとエバを創造されたのであった。
- 79 文誉進, G-HP-HF-HM; 天の心情原理によれば、天の父母はアダムとエバを人類の最初のモデルとして創造された。その後の人間の創造は人間の5パーセントの投入——父母の責任と、遺伝的な要素をも含めた連帯的な血統の関与——によってなされる。アダムとエバ以後、すべての人間は、天の父母が創

造において 95 パーセントを投入された総合としての全造物に備わっている価値を持っているが、5 パーセントの人間の責任は、それぞれ異なる状況の血統から来ているので、それぞれ異なる人間性、事情、蕩減条件をもたらす。

80 EDP(『原理講論』), 83, 198, 206, 226, 230, 266.

ノア、アブラハム、ヤコブ、モーセ、イエスのような摂理的中心人物に比して、彼らの妻——その名前さえ聖書に記されていないノアの妻、サラ、ラケル、チッポラ、イエスの花嫁になるべき女性——は、女性の側に貢献できなかった。一人の注目に値する例外がリベカである。彼女は夫イサクが愛したカインの立場の息子エサウよりも、アベルの立場の息子ヤコブに目をかけて、彼を支えた(創世記 25: 22-23, 28; EDP, 218-219)。しかし、リベカとイサクの路程において、摂理的な時は、アダムとエバの罪を蕩減する世界的、宇宙的な基台の路程でなかったために、リベカの貢献は全女性と宇宙的四位基台に関与することはできなかった。

81 EDP(『原理講論』),19.

82 CSG(『天聖經』2006),132.

83 CSG(『天聖經』2013),88; EDP(『原理講論』),176.

84 EDP(『原理講論』),“復帰,”“基台,”そして“モーセとイエス”に関する章を参照のこと。

85 同上,178.

86 同上,199; ノアとその妻の家族に関する詳細な議論はこの章の範囲を超えているので省略する。

87 創世記 6:9.

88 創世記 6:9; EDP(『原理講論』),199.

89 EDP(『原理講論』),203.

90 MOP(『平和のメッセージ』),143; もしアダムとエバの家庭、あるいはノアとその妻の家庭において、三大祝福の5つの役割をすべて達成することによって、心情原理の真の愛と人格の完成がなされていたならば、彼らから生まれた人類はそのいずれかの父母を通じて、人間の価値を始めとする天の父母の創造目的を学んで、すべての人間は父母を同じくする兄弟姉妹であることを理解したことであろう。そうして人間の完成は、個人から家庭へ、そして神の一族としての人類全体に及んだことであろう。しかしカインとアベルによって、アダムとエバの家庭に一体化でなくて分裂が生じ、その兄弟間の不平等がその後の墮落した人類のモデルとなった。ノアとその妻の家庭がアダムとエバの家庭の失敗を蕩減するのに失敗したとき、墮落した人類はより大きな分裂したグループに分かれていき、氏族、民族、国家の分裂に達して、土地と資源を奪い合うようになった。さらにノアとその妻の家庭の失敗によって生じた結果——その一つが、人種の分裂が生じたことである——に関しては、この章の範囲を超えているので省略する。

91 出エジプト記 3:6; EDP(『原理講論』),215-222;

三代に渡った中心人物の行為に関する議論はこの論文の範囲を超えているので省略する。

92 創世記 16-30;しかしながら、父母や先祖からの非原理的な血統によって、人が生まれたとしても、天の父母はすべての人間が真の子女として復帰されることを待ち望んでいる。にもかかわらず、そのプロセスが長くかかるのは、関わりのある先祖からくる蕩減の重さによるのである。

93 出エジプト記 12:40; EDP(『原理講論』),213.

94 EDP(『原理講論』),234-266.

95 同上,236-237,252.

96 申命記 34:1-5; モーセは、個人的なレベルでは、荒野路程における一世のイスラエル民族の不信の罪を犯さなかったが、共同レベルでは、彼は中心人物であったという事実によって、民族の運命を逃れることはできなかった。これが、人が個人的には無実であるが見えても、共同的レベルの罪荷からくる苦難をうけるという例である。

97 民数記 32:11-12.

98 出エジプト記:15,21.

99 出エジプト記 4:25-26; EDP(『原理講論』),240.

100 モーセとイスラエル民族の国家レベルの基台に関する議論はこの論文の範囲を超えているので省略する。

101 CSG(『天聖經』2013),138.

- 102 CSG (『天聖經』2006),2029; カインとアベルの立場に分かれた妻の分裂にたいする新たな蕩滅条件は、中心的な血統であるアブラハムとサラの三代の氏族レベルの基台に現われたのであるが、不幸にも、それはザカリヤ家庭で再び、繰り返された。ザカリヤ、エリサベツ、マリヤはイエスとその花嫁の道を直くしなければならなかったのであるが、それに関することはこの論文の範囲を超えているので省略する。
- 103 イエスと花嫁の歩む道は、摂理的な時に、世界的、宇宙的な基台を復歸することにあつたので、イエスが世界的レベルで個人的な靈的基台を造成したとき、イエスの靈的子女であるキリスト教徒は、2000年のキリスト教の救援摂理を通じて、世界的な靈的レベルに拡大して、再臨主とその花嫁を迎える準備をするようになった。しかしながら、墮落人間の靈肉の完全な復歸は、男性と女性の中心人物が、個人的レベルから始めて、家族、氏族、民族、国家、そして世界、宇宙に至るまで、個人的、共同的レベルでの靈肉両面の完成をなしたとき、はじめて可能になるのである。
- 104 Huston Smith, The World's Religions(『世界の宗教』) (San Francisco: HarperSanFrancisco, 1991), 374-376.
- 105 同上,377.
- 106 E.O.James,The Cult of the Mother Goddess (『女神のカルト』)(New York: Barnes & Noble, 1994),11; 女神が崇拜されるようになって、完全な復歸はまだなされておらず、そして唯一神の信仰はまだ十分でなかったため、世界はまだ多様な自然神を崇拜する多神教であった。
- 107 James,The Ancient Gods (『太古の神々』),17.
- 108 同上.
- 109 “Mother Earth(「母なる大地」)”,in Jonathan Z. Smith ed., The HarperCollins Dictionary of Religion(『ハーパーコリンズ宗教事典』)(San Francisco: HarperSanFrancisco,1995),733.
- 110 James,The Ancient Gods(『太古の神々』),46; The Cult of the Mother Goddess(『女神のカルト』),24.
- 111 James,The Ancient Gods,47.
- 112 レビ記 11:44; ルカによる福音書 1:49; 『コーラン』Sura 2.
- 113 蕩滅条件は一定の期間を要するので、その間、我々は非原理的な墮落世界で耐えなければならない。人類を代表する中心的な基台が失敗し、摂理が延長するようになるとき、それは一定の数的期間を伴う蕩滅条件という形になる。EDP(『原理講論』), PartII, Ch.3, “復歸歴史の各時代とその年数の形成”を参照のこと。
- 114 James,The Cult of Mother Goddess (『女神のカルト』),228.
- 115 同上.
- 116 Gerda Lerner, The Creation of Patriarchy (『父権性の誕生』)(New York: Oxford University Press,1986),145,180; Rosemary Radford Ruether,Sexism and God-Talk (『性差別と神の言』)(Boston: Beacon Press, 1983),53.
- 117 ギリシア神話が多くの中の一例である。
- 118 Ruether,54.
- 119 Mary Daly, Beyond God the Father (『父なる神を超えて』)(Boston: Beacon Press, 1985), 2; Lerner, 216.
- 120 Ruether,53.
- 121 Clifford Geertz,The Interpretation of Cultures (『文明の解釈』)(New York: Basic Books,2000),89.
- 122 Lerner, 219; Carol P.Christ,“Symbols of Goddess and God in Feminist Theology,”(「フェミニズムにおける女神と神の象徴」)in Carol Olson ed.,The Book of the Goddess Past and Present: An Introduction to Her Religion (『過去と現在の女神像の本: 女神の宗教への招待』)(New York: Crossroad, 1983),235-238; Elizabeth A. Johnson, She Who is (『彼女は誰か』)(New York: Crossroad, 1997),23.
- 123 EDP(『原理講論』),178.
- 124 Peters, 1.
- 125 James,The Cult,79; Peggy Reeves Sanday, Female Power and Male Dominance: On the Origins of Sexual Inequality (『女権と男性の支配: 性差別の起源について』)(New York: Cambridge University Press, 1984),224.
- 126 列王記上,16:32;18:19;19:10.
- 127 申命記 23:18; ホセア書 4:14.
- 128 Bernard W. Anderson, Understanding the Old Testament,4th ed.(『旧約聖書の解釈』)(New Jersey, Prentice-Hall,1986),191.
- 129 James,The Cult,82.

- 130 出エジプト記 20:14,17; 申命記 18:12.
- 131 William Foxwell Albright, *Archeology and the Religion of Israel* (『考古学とイスラエルの宗教』)(New York: Anchor Books, 1969),168; Sanday,223-225.
- 132 Frank Moore Cross, *Canaanite Myth and Hebrew Epic* (『カナン神話とヘブライの叙事詩』)(Cambridge: Harvard University Press, 1997),33; Raphael Patai, *The Hebrew Goddess* (『ヘブライの女神』)(Detroit: Wayne State University Press, 1990),38; Sanday,223.
- 133 創世記 2:9; Sanday,220,223.
- 134 創世記 3:5; Sanday,223-224.
- 135 Judith Ochshorn, *The Female Experience and the Nature of the Divine* (『女性体験と神性』)(Bloomington: Indiana University Press,1981),148.
- 136 同上,149.
- 137 同上.
- 138 Elaine Pagels, *Adam, Eve, and the Serpent* (『アダム、エバ、蛇』)(New York: Random House,1988),xxii.
- 139 Pagels,同上.
- 140 Lerner,162; Pagels,同上.
- 141 Pagels, xxii-xxiii.
- 142 EDP (『原理講論』),138.
- 143 Rosemary Radford Ruether, *Goddesses and the Divine Feminine* (『女性の神々と神の女性性格』)(Berkeley: University of California Press, 2005),81.
- 144 詩編 29:2; イザヤ書 6:3; Tikva Frymer-Kensky, *In the Wake of the Goddesses: Women, Culture, and Biblical transformation of Pagan Myth* (『女性の神々の通夜:女性、文化、異教神話にたいする聖書解釈の変化』)(New York: Free Press,1993),188-189; Ruether, *Goddesses*,76.
- 145 Howard Eilberg-Schwartz, *God's Phallus: And Other Problems for Men and Monotheism* (『神のファルス:男性と一神教に関する、その他の問題点』)(Boston: Beacon Press, 1994),86; Frymer-Kensky,188; Pagels, "What Became of God the mother?," (『母なる神はどうなったか?』) 107; Ruether, *Goddesses*,76;
- 146 Eilbert-Schwartz,3; Ruether, *Goddesses*,81.
- 147 同上.
- 148 同上.
- 149 同上.
- 150 エレミヤ書 3:2 と エゼキエル書 16:25-36 は、そのいくつかの例である。
- 151 イザヤ書 10:11, 13:11; エレミヤ書 50:40; エゼキエル書 16:43-46,49
- 152 Gershom Scholem, *Major Trends in Jewish Mysticism* (『ユダヤ神秘主義の主流傾向』)(New York: Schocken Books, 1995),229.
- 天の父母の 95 パーセントの責任と人間の 5 パーセントの自由意志の責任分担に関して言えば、天の父母が関与できるのは、人間が真理を理解する道を開こうとするところにある(この例では、天の父母が性のバランスのとれた、同等の権力を持つ天の父と天の母であるという事実に関すること)。しかし、もし人間が無知で、真理に応じなければ、天の父母がその目的で準備されたことは望んだ実を結ばない。
- 153 文誉進,G-HP-HF-HM.
- 154 EDP (『原理講論』),280-282; カインとアベルの差別的な位置は墮落によるものであって、やがては復帰されて、なくならなくてはならないものである。しかしながら、復帰歴史の中で、絶対的な 5 パーセントの人間の自由意志があるために、その位置は固定されたものでない。すなわち、人がアベルの位置にあったとしても、もし撰理的な責任を果たさなければ、いつでもカインの位置になりえるのである。
- 155 EDP, Part II Ch. 6. 再臨論.
- 156 Pagels, *Gnostic* (『グノーシス主義』),49-58; Ruether, *Sexism*,59-60.
- 157 Pagels, "What Became of God the Mother? Conflicting Images of God in Early Christianity (「母なる神はどうなったのか? 初期のキリスト教における対立する神のイメージ」)," in Carol P. Christ & Judith Plaskow eds., *Womanspirit Rising* (『女性精神の台頭:フェミニストによる宗教の解説』)(San Francisco: HarperSanFrancisco, 1992),108.

- 158 Hippolytus, quoted in Pagels, *Gnostics*, 49.
- 159 The Nag Hammadi Scriptures (『ナグハマディ経典』), Marvin Meyer, ed. (New York: HarperCollins, 2008), 161; 母親との関係からユダヤ人と認められる事項において、ユダヤの律法(ハラカ)は、ユダヤ人の母か、ユダヤ教に改宗した母から生まれた人をユダヤ人と認めることが示されている。『ユダヤ教に関するオックスフォードの辞書』を参照のこと。 *Oxford Dictionary of the Jewish Religion*, eds. R. J. Zwi Werblowsky and Geoffrey Wigoder (New York: Oxford University Press, 1997), 369.
- 160 Nag Hammadi, 152.
- 161 同上, 108.
- 162 Edmund J. Fortman, *The Triune God* (『三位一体の神: 三位一体論の歴史的考察』) (Eugene: Wipf and Stock Publishers, 1999), xvi; Pagels, *Gnostics*, 52.
- 163 Pagels, 52.
- 164 Elaine Pagels, “What Became,” 113.
- 165 同上, 113-114.
- 166 Bart D. Ehrman, *The New Testament* (『新約聖書』) (New York: Oxford University Press, 2004), 1; Elisabeth Schussler Fiorenza, *In Memory of Her* (『彼女の記憶』) (New York: Crossroad, 1988), 53, 56; Elaine Pagels, *Adam, Eve, and the Serpent* (『アダム、エバ、蛇』) (New York: Random House, 1988), 152.
- 167 Walter Bauer, *Orthodoxy and Heresy in Earliest Christianity* (『初期キリスト教における正統と異端』), eds. Robert A. Draft and Gerhard Krodel (Philadelphia: Fortress Press, 1971), 131-132; Fiorenza, 53.
- 168 Fiorenza, 53.; Pagels, *Gnostic*, 49-58.
- 169 Fiorenza, 52-53; Pagels, *Gnostics*, 57.
- 170 Ruether, *Sexism*, 126.
- 171 Ehrman, 24.
- 172 ルカによる福音書 24:34; 使徒行伝 4:33; 8:37; エペソ人への手紙 5:20.
- 173 Ruether, *Sexism*, 125-126.
- 174 ペテロの第二の手紙 1:11.
- 175 ヨハネによる福音書 3:18; Rosemary Radford Ruether, *Mary—The feminine Face of the Church* (『マリヤ: 教会の女性の顔』) (Philadelphia: The Westminster Press, 1977), 51.
- 176 Ruether, *Mary*, 53.
- 177 同上.
- 178 同上, 54.
- 179 Rosemary Radford Ruether, “Misogynism and Virginal Feminism in the Fathers of the Church,” in Rosemary Radford Ruether, *Religion and Sexism* (New York: Simon and Schuster, 1974), p. 153. Rosemary Radford Ruether, ed. *Religion and Sexism* (『宗教と性差別』), 153.
- 180 Augustine, *On Marriage and Concupiscence* (『結婚と情欲について』), Amazon Kindle, Bk.1, Ch.9.
- 181 Eleanor Commo McLaughlin, “Equality of Souls, Inequality of Sexes: Woman in Medieval Theology (「魂の平等、性の不平等: 中世神学における女性」),” in Rosemary Radford Ruether, ed. *Religion and Sexism*, 220.
- 182 CSG (『天聖經』2013), 302.
- 183 EDP, 398-399.
- 184 2012年8月13日、文師は清心病院における、聖和前の最後の祈禱で、「すべてを成した」と祈られた。; 2012年9月15日の「文師の聖和式の記念ビデオプレゼンテーション」(FFWP 韓国歴史編纂室)を参照のこと。
- 185 ゲルダ・ラーナー (Gerda Lerner) は次のように述べている。: 「父権性は女性の協力があってこそ機能する。その協力はいくつかのやり方でなされている。: 性のドグマの注入、教育を奪うこと、女性に女性の歴史の知識を教えないこと、拘束やあからさまな圧力によって女性を互いに分裂させること、経済的な資産や政治的権力の接近において差別すること、従順な女性に特権をあたえることである」(p.219)。統一運動の最近の動向に従う者は、容易に、真の母にたいして直接的、間接的に反対している、幾人かの真の息子を含んだ真の子女を思い浮かべることであろう。
- また、神を父としてのみ捉える初期の男性中心の統一主義者については、Steven K. Nomura の(『男性主体の神』)を参照のこと。 “God as Masculine Subject Partner,” in *Journal of Unification Studies*, IV (2001-2002): 57-72.
- 186 Ruether, *Religion*, 156.

- 187 同上,157.
- 188 Johnson,24; Lerner,206-207; McLaughlin,216.
- 189 Aquinas, Summa Theologica (『神学大全』), Part1, Q.92, Art.1, trans. by Fathers of the English Dominican Province Benziger Brothers, Amazon Kindle edition; Johnson,24; McLaughlin, 217.
- 190 Aristotle, “De Generatione Animalium (「動物の発生について」),”The Basic Works of Aristotle, ed. by Richard Mckeon(『アリストテレスの主要著作集』) (New York: Random House, 1941),676.
- 191 Martina Deuchler, The Confucian Transformation of Korea (『韓国の儒教的変貌』) (Cambridge: Council on East Asian Studies, Harvard University, 1992),280.
- 192 同上,284-285.
- 193 同上,289.
- 194 同上.
- 195 同上,262.
- 196 韓鶴子「祝福家庭は血統をつなげなければならない」、元老メンバーの昼食会でのみ言、天聖宮、February 1,2015. <http://tparents.org/Moon-Talks/HakJaHanMoon-15/HakJaHan-150221.pdf>
- 197 Fortman, xv-xvi;EDP,25.
- 198 EDP(『原理講論』),29.
- 199 Sallie McFague, Models of God (『神のモデル』) (Philadelphia: Fortress Press, 1988),97.
- 200 Sun Myung Moon, “Inauguration of the Abel Women’s UN(アベル女性UNの創設),” Cheongshim Peace World Center, July 16, 2012. <http://www.tparents.org/Moon-Talks/SunMyungMoon12/SunMyungMoon-120616a.htm>
- 201 Ibid.
- 202 Ibid.

【参考文献】

- Albright, William Foxwell. Archaeology and the Religion of Israel (『考古学とイスラエルの宗教』). New York: Anchor Books, 1969.
- Anderson, Bernhard W. Understanding the Old Testament (『旧約聖書の解釈』), 4th ed. New Jersey: Prentice-Hall, 1986.
- Augustine. On Marriage and Concupiscence (『結婚と情欲について』). Amazon Kindle Classics
- Bauer, Walter. Orthodoxy and Heresy in Earliest Christianity (『初期キリスト教における正統と異端』). Edited by Robert A. Kraft and Gerhard Krodel. Philadelphia: Fortress Press, 1971.
- Cheon Seong Gyeong (『天聖經』)、世界平和統一家庭連合、2006.
- Cheon Seong Gyeong (『天聖經』)、世界平和統一家庭連合、2013.
- Christ, Carol P. and Judith Plaskow, eds. Woman spirit Rising: A Feminist Reader in Religion (『女性精神の台頭: フェミニストによる宗教の解説』). New York: Harper San Francisco, 1992.
- Cross, Frank Moore. Canaanite Myth and Hebrew Epic (『カナン神話とヘブライの叙事詩』). Cambridge: Harvard University Press, 1997.
- Daly, Mary. Beyond God the Father (『父なる神を超えて』). Boston: Beacon Press, 1985.
- Deuchler, Martina. The Confucian Transformation of Korea (『韓国の儒教的変貌』). Cambridge: Council on East Asian Studies, Harvard University, 1992.
- Eilbert-Schwartz. God's Phallus: And Other Problems for Men and Monotheism (『神のファルス: 男性と一神教に関する、その他の問題点』). Boston: Beacon Press, 1994.
- Erhman, Bart D. The New Testament (『新約聖書』). New York: Oxford University Press, 2004.
- Exposition of the Divine Principle (『原理講論』). New York: HSA-UWC, 2005.
- Fiorenza, Elisabeth Schussler. In Memory of Her (『彼女の記憶』). New York: Crossroad, 1988.
- Fortman, J. Edmund. The Triune God: A Historical Study of the Doctrine of the Trinity (『三位一体の神: 三位一体論の歴史的考察』), Eugene: Wipf and Stock Publishers, 1999.
- Frymer-Kensky, Tikva. In the Wake of the Goddesses: Women, Culture, and Biblical Transformation of Pagan Myth (『女性の神々の通夜: 女性、文化、異教神話にたいする聖書解釈の変化』). New York: Free Press, 1993.
- Geisler, Norman. Systematic Theology (『組織神学』), Vol. 2. Minneapolis: Bethany House, 2003.
- Geertz, Clifford. The Interpretation of Cultures (『文明の解釈』). New York: Basic Books, 2000.
- Hendricks, Tyler. “An Inquiry into God as Our Heavenly Parents (「我々の天の父母なる神についての考察」),” Applied Unificationism blog, entry posted May 20, 2013,
<http://www.appliedunificationism.com/2013/04/20/an-inquiry-into-god-as-our-heavenly-parents>
- James, E. O. The Ancient Gods (『太古の神々』). New York: Capricorn Books, 1964.
- . The Cult of the Mother-Goddess (『女神のカルト』). New York: Barnes & Noble, 1994.
- Johnson, Elizabeth A. She Who is (『彼女は誰か』). New York: Crossroad, 1997.
- Kim, Young Oon. Unification Theology (金榮雲『統一神学』). New York: HSA-UWC, 1987.
- Lerder, Gerda. The Creation of Patriarchy (『父権性の誕生』). New York: Oxford University Press, 1986.
- McKeon, Richard, ed. The Basic Works of Aristotle (『アリストテレスの主要著作集』). New York: Random House, 1941.
- Message of Peace: Pyeong Hwa Hoon Gyeong (『平和のメッセージ: 平和訓経』). 世界平和統一家庭連合, 2007.
- Meyer, Marvin, ed. The Nag Hammadi Scriptures (『ナグハマディ経典』). New York: HarperOne, 2008.
- Moon, Sun-Myung. 文鮮明「絶対価値の探究: 諸科学の調和」、第5回科学の統一に関する国際会議、ワシントン D. C., 1976.
<http://www.tparents.org/moon-talks/sunmyungmoon76/SunMyungMoon-761125.htm>
- Moon, Ye-Jin. “God as the Heavenly Parent of Heavenly Father and Heavenly Mother” 文誉進「天の父であり天の母である天の父母としての神」 Applied Unificationism blog, entry posted on Jan. 20, 2014.
<http://www.appliedunificationism.com/2014/01/20/god-as-the-heavenly-parent-of-heavenly-father-and-heavenly-mother>.

- New Essentials of Unification Thought: Head-Wing Thought. (『新版統一思想要綱:頭翼思想』),Tokyo: Kogensha, 2006.
- Nomura, Stephen K. “God as Masculine Subject Partner (『男性主体の神』),” The Journal of Unification Studies IV (2001-2002).
- Ochshorn, Judith. The Female Experience and the Nature of the Divine (『女性体験と神性』). Bloomington: Indiana University Press, 1981.
- Olson, Carl, ed. The Book of the Goddess Past and Present: An Introduction to Her Religion (『過去と現在の女神像の本:女神の宗教への招待』). New York: Crossroad, 1983.
- Pagels, Elaine. Adam, Eve, and the Serpent (『アダム、エバ、蛇』). New York: Random House, 1988.
- _____. The Gnostic Gospels (『グノーシス経典』), New York: Vintage Books, 1989.
- Patai, Raphael. Hebrew Goddess (『ヘブライの女神』). Detroit: Wayne University Press, 1990.
- Peters, F. E. The Children of Abraham (『アブラハムの子孫』). New Jersey: Princeton University Press, 2004.
- Ruether, Rosemary Radford. Goddess and the Divine Feminine (『女性の神々と神の女性性格』). Berkeley: University of California Press, 2005.
- _____. Mary—The Feminine Face of the Church (『マリヤ:教会の女性の顔』). Philadelphia: Westminster Press, 1977.
- _____, ed. Religion and Sexism (『宗教と性差別』). New York: Simon and Schuster, 1974.
- _____. Sexism and God-Talk (『性差別と神の言』): Toward a Feminist Theology. Boston: Beacon Press, 1983.
- Sanday, Peggy Reeves. Female Power and Male Dominance: On the Origins of Sexual Inequality (『女権と男性の支配:性差別の起源について』). New York: Cambridge University Press, 1984.
- Scholem, Gershom. Major Trends in Jewish Mysticism (『ユダヤ神秘主義の主流傾向』). New York: Schocken Books, 1995.
- Smith, Huston. The World’s Religions (『世界の宗教』). San Francisco: Harper San Francisco, 1991.
- Ted Peters, ed., Science and Theology: The New Consonance (『科学と宗教:新たな調和』). Boulder: Westview press, 1998.
- Tillich, Paul. Systematic Theology (『組織神学』), Vol. 1. Chicago: The University of Chicago Press, 1951.
- “True Mother Announces New Directions at Leaders Conference in Korea (真の母が韓国での指導者会議において新しい指示を発表)” Family Federation for World Peace and Unification News, January 8, 2013.
- http://www.familyfed.org/members/index.php?option=com_content&view=article&id=4021:true-mother-calls-church-to-pray-in-name-of-heavenly-parents&catid=87:true-parents&itemid=298
- World Scripture and the Teachings of Sun Myung Moon (『世界経典と文鮮明師のみ言葉』). New York: Universal Peace Federation, 2011.